

2011

Summer Semester

POLITICAL

SCIENCE 1

(Lecturer; Professor TAKAHASHI Naoki)



Presented by URAI Kyuzo

(Department of Letters 1)

Political Science 1 (Prof. N. Takahashi)

The Transcript of the Lectures

Version July, 2011. Presented by URAI Kyuzo
(Department of Letters 1 Team 7 [Spanish class])

Preface —私には夢があった。あきらめるわけにはいかなかった。

『深愛』(水樹奈々、2011 年、幻冬舎) —

このプリントは文 1 生対象政治 1(金曜 4 限)を扱います。

プリントでは、講義+αを網羅し、過去に出題された箇所を重点解説します。共に挙げた過去問・出題分析も利用すれば効果は倍増すると自負しております。

なお、このシケプリは試験範囲(ひいては試験科目)を無視した斬新な構成です。試験範囲外も扱いますし、繋がりがあれば他科目にも触れます。品質は保証できますが量も膨大です。印刷はご計画的に行って下さい。

制作には万全を期したつもりですが、不慮の誤り、欠缺があるかもしれません。読者諸賢の御教示を仰ぎたい次第であります。

このプリントにより駒場が優量産プラントとなることを祈念しております。

The chief editor RDSK@Q.Urah

— 不可能な程燃えるでしょ? *Are you OK?*

どこにもない未来創り出すよ(今すぐ)一緒に —
水樹奈々"POP MASTER"(作詞:水樹奈々; 2011 年)

2011 年度の政治 1 試験日程

2011 年 7 月 22 日(金)

15:05~16:05(60 分)

論述形式、持ち込み不可、範囲:講義全体

7 組:110032-110045→1311 教室

110046-110047→1312 教室



Index of ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

000. Introduction	2
100. 意志決定の基礎理論	6
200. 政治的人間の理論	18
300. 政治集団の理論	27
400. 政治社会の理論	52
500. 講義を終わるにあたって	72
Bibliography	76
あとがき	80

注意)このプリントは色が多いです。
赤と緑/水色とピンクを組み合わせない、赤はマゼンタにする、赤と緑が近いときは柄を変える(ハッチング)、文字に影をつけないなど対処しましたが、見えにくければ言って下さい。
ちなみに、プレゼンなんかではあまり色を多用しない方がよいと思います。

000. Introduction

・政治理論－社会・人間の行動理論

→現代政治学(political science)*による分析・研究

*political science…W.W. II 後アメリカ合衆国で成立(cf. 011、012)

・講義目標－基礎用語・基礎概念の理解、諸理論の学習での多様な前提の把握

→人間社会の理解

001. 政治学的思考法

・社会科学 — ex)経済学…利益(benefit)

II

社会現象の探求

↑↓

費用(cost)

⇒両者の計算に基づき決定・行動
※当然、効率性(efficiency)も考慮

※利益と費用の大小関係に着目

社会学…社会(集団)(家族<地域<国家<世界)

～関係性

↑↓

個人

役割(role)の重視…個人:各々の属する場面に応じ役割を持つ

→役割に従う行動(逸脱すると制裁)

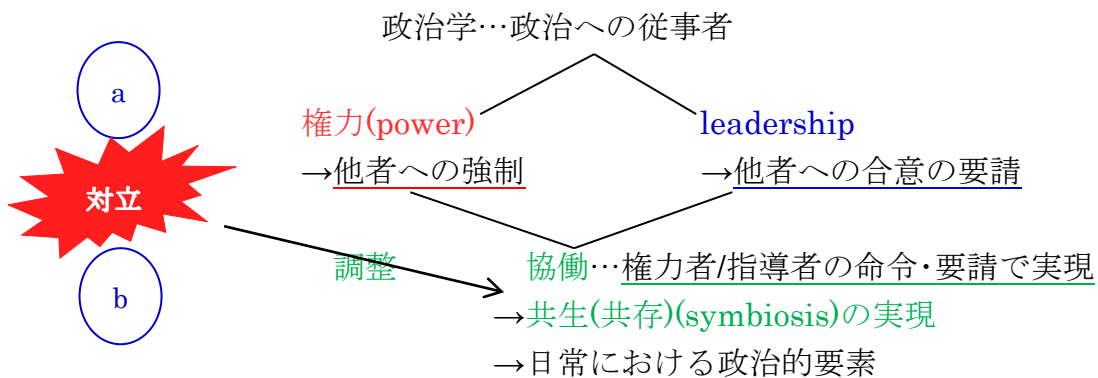
→各集団に応じ複数の役割(cf. role theory)

Column:今年はなかった話

・同一視;他者に自分を投影

※帰属意識と同一視のズレ

→葛藤の発生



cf.) 経済学 ↔ 政治学
Case. 原発事故

経済学的思考	政治学的思考
○(∵ 費用対効果)	×(∵ 責任の所在)

002. 教科書・参考文献/003. 特別付録—試験&評価— 後述・省略

010. Political Science

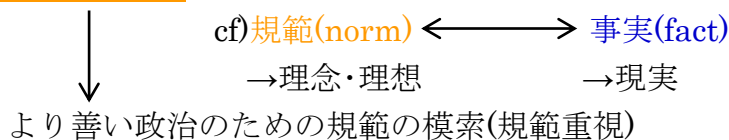
現代政治学(political science) ↔ 政治学(W.W. II 前)(politics)

011. 政治学における歴史的三類型(理念型による分類)

☆古代から現代に渡る政治学の展開

(1) 政治哲学(political philosophy) <古代> ex) Plato, Aristotle

= 規範的政治学(normative politics)



ex) 人を殺してはならない(規範)
↑↓
殺人事件の発生(事実)

(2) 政治イデオロギー <中世末~> ex) Hobbes, Locke, Rousseau, Montesquieu

= 実践的政治学(practical politics)

(国民主権)(人民主権)(三権分立)

→ より善い政治・社会のための制度・方法の模索(方法重視)

(3) 現代政治学(political science) <W.W. II 後~> cf) 012. 現代政治学

= 経験的政治学(empirical politics)

→ 現実の政治を観察して複数の観察結果を得、帰納的に法則を発見

(4) 留意点

(a) 政治学の歴史 ≠ 単線的進歩 → 複線的展開を辿る

∵ 政治学…理念の問題を常に孕む ex) leadership—哲学的理念、規範

(b) 理念型(ideal type) ≠ 現実の類型

・存在証明不可 ・現実世界に実在しない類型=学問・理論の道具となる類型	・存在証明可
--	--------

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

ex)

理念型	現実の類型
鬱病気質 分裂症気質	ディーゼル車 ハイブリッド自動車 電気自動車

※哲学、イデオロギー、政治…ideal type

012. 現代政治学

(1) 現代政治学の特徴

(a) 事実(fact)と規範(norm)の分離

→ 規範・保留 (≠放棄) 価値中立性を目指す (⇔原則、規範・価値の問題を回避)

cf) 価値中立性(価値自由性); Max Weber(独; 1864~1920) 提唱

→ 全ての価値観から距離を置き、事象を中立的に把握する

(b) 経験論

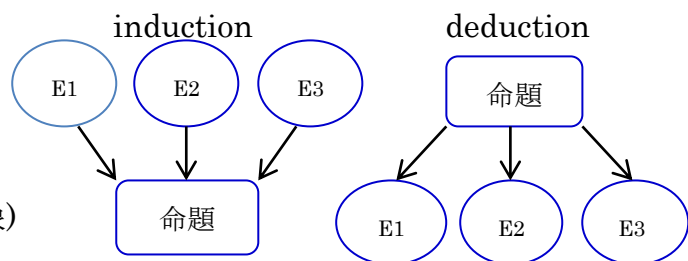
→ 多様な政治現象の観察

→ 帰納的に法則を考察

cf) leadership についての政治

→ philosopher king である必要
= 演繹的(理念<命題>→事象)

<fig:012-1 induction/deduction>



(c) 学際性(interdisciplinary)

政治…人間・経済・社会等諸分野と複合的關係

∴ 現代政治学…行動論革命以降、一般人も考察対象

→ 心理学、経済学等他の学問分野を含む必要

→ 一つの学問分野にとらわれず、多様な方法で考察(=学際性)

discipline

= 学問の専門分野

語源) キリストの弟子

◎ 現代政治学の歴史

(a) 行動論革命(Behavioral Revolution)

[旧来の政治学] 価値・制度の問題を追求

→ 一般人の思考や行動が対象外

→ 人間行動の観察による帰納的考察

cf) Behavioral Revolution VS Radical left

= 政治学の存在意義に関する論争

→ radical left ; 政治学…

- ・ 善い政治を追求する必要
- ・ 価値中立的な政治学を否定

cf) apolitical political science(非政治的政治学)

cf) 行動主義*(心理)

behaviorism

↕

behavioralism

行動論(政治)

* 人間活動を制御可とする

column:今年はなかった話

neo liberalism の訳語が「新自由主義」なのは実は好ましくない(∵英:new liberalism という用語アリ、紛らわしい)

(b) ポスト行動論(Post Behavioralism)

—新制度論(new institutionalism)(1970 後~1980s)—

☆人間の自由意志と制度との関係を如何に考察するか

保守派

VS

進歩派

・neo liberalism

・rational institutionalism

・historical institutionalism

→人間の合理性を好み、規制(活動
を阻むもの)撤廃での活性化模索

→制度制定の背景、制度の妥当性を吟味

→規制緩和、自由化推進

→規制緩和、自由化に慎重

※post behavioralism≠behavioralism の否定 (post…「経験した」の意に近い)

→behavioralism 後のあり方を検討、則ち behavioralism を踏襲した議論

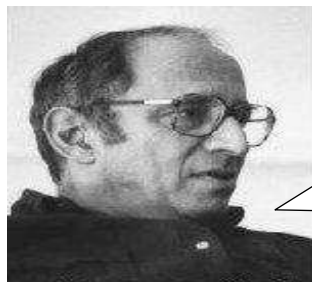
(c) 注意点

(i) 特定体系にとらわれない(∵政治学自体の体系が確立している訳ではない)

political science≠学術体系

→行動論主義・ポスト行動論主義の傾向を示す政治学に与えられた名称

(ii) 政治学における「科学」、「価値中立」



cf) T.S. Kuhn "The Structure of Scientific Revolutions" (1962)

paradigm(思考法の様相)

→科学革命=paradigm shift

政治学:paradigm 多⇒shift 易(∵必ずしも「中立」とはいえない)

ex) 比較政治学…先進国と途上国を比較

→途上国の政治を先進国化するための政治論

∴価値観の混入(途上国<先進国)

013. 理論の分類

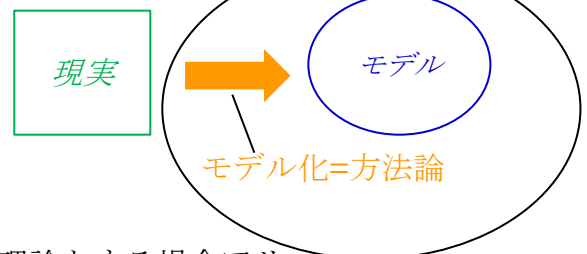
①モデル(model)

→複雑な社会を特定型に再構成し、考察易化

②方法論(methodology)

→複雑な社会をモデル化する方法を考察

<fig;013-1>



※方法論+モデルを理論とする場合アリ

100. 意志決定の基礎理論

110. 利益関心(interest)

111. 概念

(1) 政治学における基本的思考

・ある actor は、その合理的利益関心に従い行動・意志決定(decision making)する

∴ $D=f(ir)$ が成立(D…decision making, ir…interest) (D と ir の相互関係)

(2) interest(利益関心)

(a) 具体的に「得になる」物事

→ 経済的・社会的・心理的 etc.

(b) 「注意や関心を引きつける」物事(ex. 東日本大震災への募金)

→ 具体的な得が出るとは限らない

(c) 合理性—理性—

→ 哲学的: 思慮分別に基づき行動する能力で、目標設定に関連

→ 科学的: 目的合理性: ある目的に対し最短経路をとるように振る舞う

actor…行為者[現代社会学]≠個人(特徴アリ)
→ { 個人の特徴を排し、抽象化
・複数の役割を演じる

112. 歴史的淵源

・interest…root.1) 人間の合理性(人間: 理性保有) (近代以降)

(a) 中世ヨーロッパ—カトリックにより人間観固定

神に導かれる存在
理性極小
神の理性に依存

神=絶対者=最高の理性保持

(b) 近代の人間観—神学から離れて人間を考察

ex) John Locke(英; 1632-1704)



人間…神よりも下位の存在 but 神から独立した存在
→ 失敗を反省し、誤りを正すことができる理性を保有
→ 個々の独立した判断で自己決定する(→自己責任発生)
= 自己決定的人間[編集注; 02, 05, 09 年出題歴アリ]

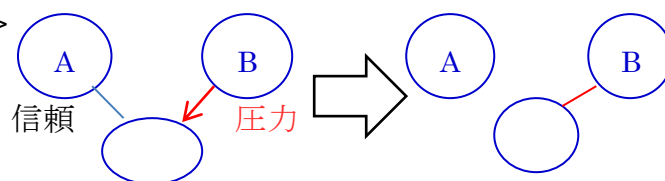
(c) 利益の考え方… { 自らの利益・欲望を肯定
→ 私益追求の肯定 { あるがままの人間の姿を受容

cf) Niccolo Machiavelli(伊; 1469-1527)



人間の本質=野心・貪欲(≠中世の人間観)
『君主論』: 「人間は恐れている者より愛情を感じている者を容赦なく傷つけるものである」
∴ 元来人は邪悪である(∴ 恩義・愛情の絆<(処刑の)恐怖)
→ 人間: 欲望保有、欲望実現を追求(evil と異なることに注意)
→ 己の利益に反するとき愛情放棄

<fig112-1>



※圧力により関係変化

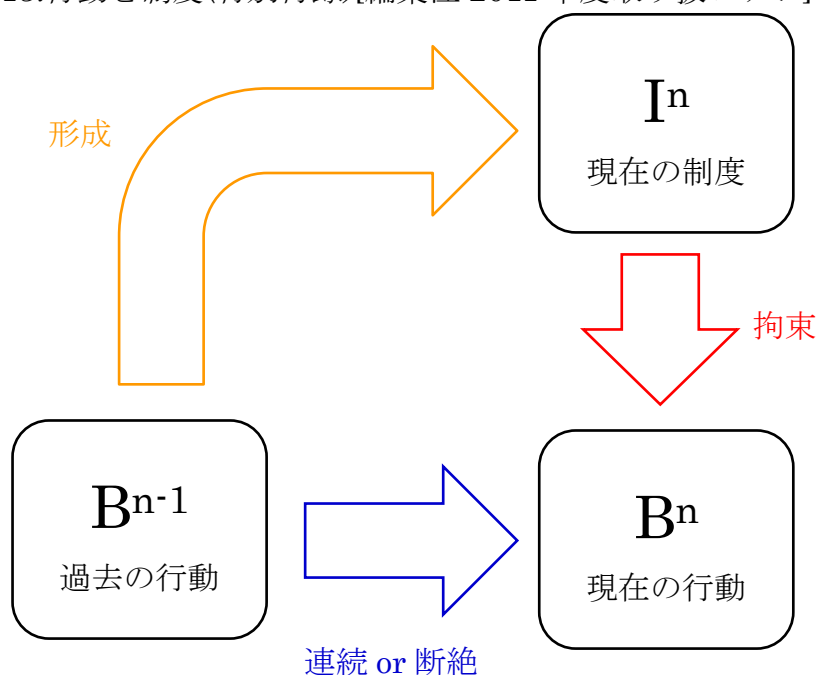
root.2)Jeremy Bentham(英;1748-1832)

功利主義(utilitarianism) (cf.310-(2))

→・幸福(happiness)=快樂(楽しみ)アリ ∧ 苦痛(苦しみ)ナシ
 ・幸福(=interest)の増大=人間の行動原則

※1.+2. →interest による行動決定

113.行動と制度(特別付録)(編集注:2011 年度取り扱いナシ]



※行動…思考法など含む

制度…人々の定型化された行動様式

※現在の制度は過去の行動に基づいて形成される

作られた制度は現在の行動を拘束する

過去の行動と現在の行動に断絶があった場合

→現在の行動から作られる未来の制度は現在の制度と違ったものになる

→行動によって制度が変わることもある

120. 影響力(influence)[編集注;120 番台は過去やたらと出ています]

[思考の基礎]actor.1…interest A に基づき意志決定

actor.2…interest B に基づき意志決定 (社会;複数の actor)

actor.2 $\xrightarrow{\quad}$ actor.1

influence \rightarrow actor.1 の行動変化

\rightarrow influence=他の actor からの、行動・内面を変えさせる作用

$\therefore D=f_{(ir)} \longrightarrow D=f_{(ir,if)}$ (if…influence) (意志決定=利益関心+影響力)

121. 概念

• X…………… \rightarrow A

if ナシ \Rightarrow actor.A…a を行う

• X $\xrightarrow{\quad}$ A

if アリ \Rightarrow actor.A…a せず x を行う

(1) influence を他者に行使できるか

—物体のように考察できない

\therefore **Influence**…人と人との関係に依存(ex.教授>学生、水戸黄門>悪代官)

(2) all or nothing? \rightarrow 影響力…アリ、ナシの二者択一とはいえない

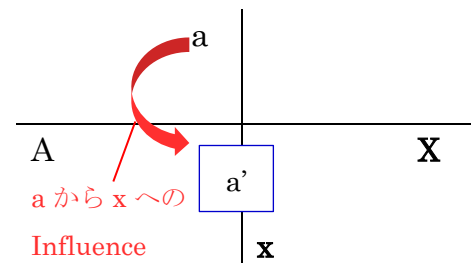
cf.<fig;121-1:(2)に当たる case>

A…a したい X…x したい

influence…A<X

この時、A の行動は a よりも x 寄りとなる(a')

influence
— actor 相互の関係に基づく
 \rightarrow 関係によっては行使不可



① 影響力の定義

(a) X が A の行動・意志決定を変える度合(表面の行動が実際に変化)

(b) 行動(behavior)に現れないが、内面の感情・態度(attitude)に影響するもの

=物事を処理する際の心的方向性

\therefore (b)の定義 \Leftrightarrow X が A の物事を処理する際の心的方向(志向)性を変える度合

② 補助概念

(a) **domain(勢力範囲)**…あらゆる影響力に存在(\therefore influence…有限)

\rightarrow どれ程の人間に、どの程度の影響を与えるか

(b) **scope(視野)**[編集注;02、07 年出題歴アリ 昨年まで訳語は「範囲」]

\rightarrow どの分野に対して影響力を及ぼすか

cf.)意図的な scope のスリカエ(ある分野でのあり方を他分野に転用)

ex.)居酒屋経営 \rightarrow コメンテーター

芸人 \rightarrow 政治家

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(c) **政治資源(political resource)** [編集注;01 年出題歴アリ]

→ある actor が他の actor に影響力を行使する際に用いる手段

ex)資金(賄賂)、物理的圧力(投獄・処刑)、人気・支持率、愛

(d) 確実性(reliability)

→ある actor が、どの程度の確率で他の actor に影響力を行使できるか

(e) 強度(strength)

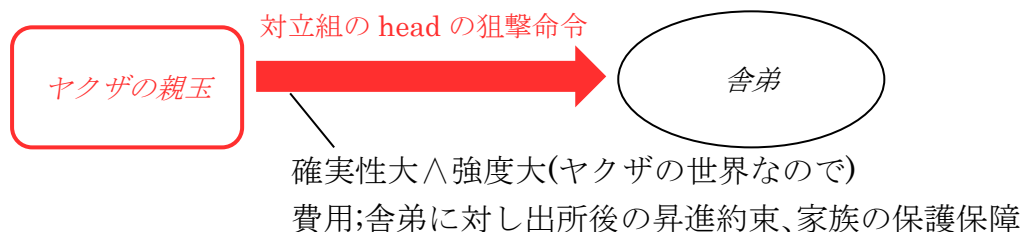
→ある actor が他の actor に対し、どの程度まで他の actor の意に反することを行わせられるか(行わせられる⇒強度大、行わせられない⇒強度小)

※強度大=特殊な actor ex)ギャング団の head \longleftrightarrow 団員諸君

(f) 費用(cost)

→ある actor が影響力を行使する際に生じる対償

<fig:121-2;(d),(e),(f)についての具体例>



※ここまで狭義の影響力(顕在的影響力 manifest —)のみを扱う

122. 広義の影響力

(1) **潜在的(potential)影響力** [編集注;01 年出題歴アリ]

→ある actor の、政治資源を用いて影響力を行使しようと思えば任意に行使できるが、現在は行使されておらず、表面化していない影響力

ex)会社:社長(2代目)—問題発生—会長(隠居中)登場、指揮

※会長:平時は表に登場せず(潜在)…有事の際登場し、影響力発揮(顕在化)

(2) **権力(power)**

→ある actor が影響力を受けたが、それに従わない場合、その actor に対し価値剥奪(deprivation)を及ぼせるような影響力

※価値剥奪…ある actor にとって価値のあるもの(生命・財産 etc)を奪うこと。

cf)現実世界…power の存在(人類誕生以来)(暴力)

↓
influence 概念の整備

※power が influence に先行して存在(122 では power \subset influence としている)

cf) **マルクス主義政治学**: 権力…特定 actor のみが有する

= 国家権力 (∴ 権力—国家による独占)

現代政治学

: 権力… 国家の独占にはない

他の actor も場合により権力アリ

ex) ギャングの head (舎弟に対し強)

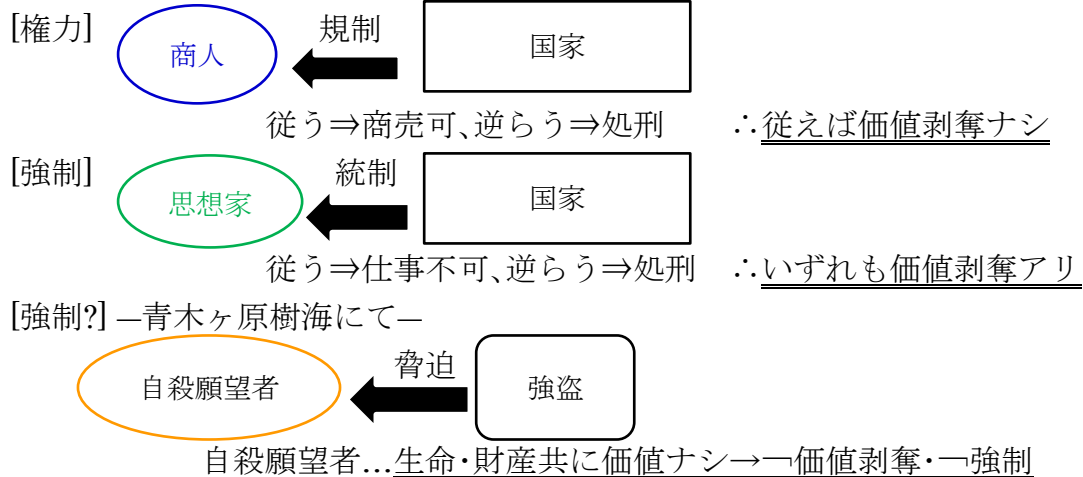
マルクス主義政治学では権力ナシ

(3) 強制 (coercion)

→ 影響力を受けた actor に、その影響力に従うか否かによらず価値剥奪が生じるような影響力

ex) 強盗… 「金を出せ。さもなくば殺す」 → 生命或いは財産を喪失

<fig;122-1; 権力、強制に関する補足説明>



(4) 権威 (authority) [編集注: 00, 04 年出題歴アリ/ 節中、正統性も出題アリ]

→ ある actor が影響力を行使された際、納得してそれに従うような影響力

ex) 予備校講師 (権威アリ) → 生徒
参考書推薦 → 参考書購入 ≠ 強制
(∴ 納得しての行動 ≠ 価値剥奪)

※ 正統性 (legitimacy) [編集注: 07, 08 年出題歴アリ]

→ ある actor による強制を他者に完全に納得させるに足る心理的・論理的根拠

= 権威が有するもの ex) 天皇制… 人々の納得に基づき成立 (≠ 正義故に成立)

(legitimacy をもつ actor… その範囲内に限り如何なる影響力も合意される)

注意) legitimacy… justice, right (正義) とは異なる (納得さえあればよい)

∴ "legitimacy" と "justice", "right" は区別する必要

∴ 「正当性」より「正統性」と表記することが望ましい

123.歴史的源泉

※以下、影響力に先立ち実在した「権力」について述べる。cf)122-(2)

=支配力・生殺与奪の権

(1) 支配・服従の事実(人間社会開始以来存在)

・貴族制・奴隷制…古代より存在(歴史上の大社会には存在)

※全ての社会においてこの事実が存在するとは限らない

cf) 社会有機体説…全ての人間は各々別個の役割を持ち、平等ではない

(cf.302-(2)-(b)) (∵人は生まれながらに内部に特定の力を持つ)

→身分制:個々の役割に応じた結果であり、問題ナシ

ref)現代社会:平等な個人の集合体←近代以降に生じた幻想

cf)Engels:原始共産制(原始時代…人類平等)

文化人類学:南米アマゾン川奥地:「著しく平等な部族」(特殊)

・族長…村で最も財産を持つ者

→村民に財を分配→財が底をつくときと交代

(特異点)周辺環境豊(=希少性ナシ)

周辺…他部族ナシ(=競争ナシ)

※停滞発生

※支配—服従関係…倫理的見地から望ましいと言えない

しかし現実社会において実在

(2) 実体的権力観[編集注:10年出題歴アリ]

近世～:力学の発達→力の概念の重視

→権力:特別に具体的な支配力

∴生まれつき有するのでなく、権力付与に源泉・基盤が存在

→特有の権力基盤に関する考察活性化

力:中世:物体内部に
在し、作用
近代:外力により
作用(≠内在)

☆power の基盤

1.N.Machiavelli(15C):実力(軍事力)

(↑背景…イタリアの都市国家分立、周辺からの侵攻)

2.M.Weber (独;1864～1920)



権威の三類型

(a) 血統

(b) 法律

(cf.法の支配、法治主義)

(c) カリスマ(charisma)(超人的資質⇔指導者の資質)

3.Marxism (20C):富(生産手段)

→持つ者=資本家階級、持たざる者=労働者階級

※以上の権力観は権力を具体的なものと見なした思考である

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(3) 機能的権力観 [編集注:07年出題歴アリ]

→ 権力は実体でなく、actor 相互の関係において働くとする(機能主義)

ex) <機能的権力> 水戸黄門: 印籠が効果 ∴ 徳川幕府と代官の関係

(印籠が波動砲を放つ訳ではないので西部劇では通用せず)

※ 実体的権力観: 王・英雄に対して有効 ←→ 臣下・民衆に対象拡大難

現代: 王・英雄少(ナシ)

∴ 大衆主義 成立: 誰もが少しは他者の行動を変える力を有するとされる

・機能主義と大衆主義の結合 ⇒ influence 概念 の形成

誰もが有する (≠「権力」(生殺与奪の掌握))

→ inflation 化した権力概念

124. 影響力の捉え方への批判

(1) 構造的権力観

→ power ∴ 人の生命・財産を奪いうるもの一強

↑
↓

influence ∴ 誰もが一定は有するもの一弱

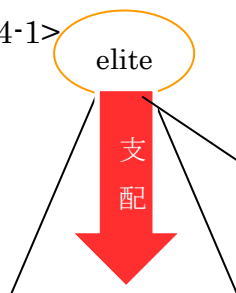
⇒ power (重大な influence) 以外は効果薄 ←→ influence の下各人が均衡

∴ 現実には均衡のとれない case 多 = 均衡理論(平等・安定)

→ 機能的権力観は現実肯定理論に過ぎないと批判

cf) C.W. Mills "Power Elite" ∴ 1950年代; American dream の時代

<fig;124-1>



→ アメリカ社会の平等性否定

→ 官僚・軍人・財界といった elite 支配

elite (選ばれし者) が権力維持

∴ 力の均衡ナシ

※ elite 支配、下層の固定は概ね定着

(2) 相互作用論

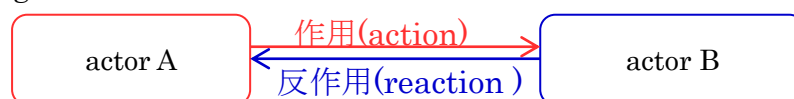
→ influence 概念 ∴ 機能主義として不十分と批判

∴ influence: 影響する方(作用)のみを考察

→ 反作用を考慮する必要アリ (作用-反作用の組で考察)

ex) leadership: a typical example of interaction

<fig;124-2;作用-反作用>



※ [物理] action-reaction 均衡

column ちょいと脱線

Mills は社会学においても活躍しています。ここでは、「社会学的想像力」という概念を紹介します。人々が情報を駆使し理性を発達させることにより、社会を巨視的に俯瞰し、それを自身の問題と結びつけて考えられるようになるための能力として、Mills はこの「社会学的想像力」という資質を挙げました。

130. ゲーム理論(game theory)

131. 起源

(1)直接的起源:card game or board game→意志決定理論

前提:限定的:予め設定された状況において考察(掟破りはナシ)
:合理的:player(意志決定する者)が自らの勝利を追求

(2)思想的起源:1.合理的人間観(近世～)

2.Machiavelli との共通性

(a)所与の状況(situation):与えられた状況の下、何をするか

cf)leadership:古代:philosopher king

(不変の真理<人類の指針>を持つー状況に左右されず)

Machiavelli:軍事力を持ち、状況を切り開ける者

(↑背景…イタリア都市国家分立、周辺の侵攻)

→崩壊の危機という状況(局面)を前提とする

(b)状況の操作:状況は作戦により変更可能とする

→新状況を作り、再考察

132. 思考法

(1)合理的計算に基づき、利益獲得に向け意志決定

(2)利益…有限(∴ situation)による利益の制約、他の player との競争)

☆game theory における”situation”

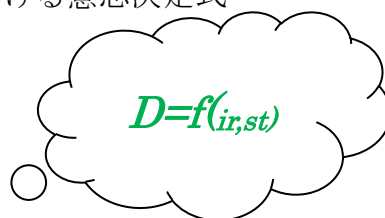
①各 player の利益がどのようなものであるか

②「条件」設定(≡”situation”、変更不可)

- ・game に参加する player の数
- ・利益の状態(相反するか否か)(原則相反)
- ・player の合理性

③「解法」の存在

☆game theory における意志決定式



※D; decision making

ir; interest

st;situation

133. 二人一定和ゲーム

Case.1) 利得行列 (payoff matrix) 1 参照

[ゲーム設定] A が左右のいずれかの手に 100 円玉を握る

B はどちらかの手を選ぶ

B は当たれば 100 円獲得、外せば 100 円喪失

<payoff matrix 1>

player		B	
A	strategy	右	左
	右	-100 +100	+100 -100
	左	+100 -100	+100 -100

※表中各セル当たりの和が全て同一数値⇒一定和ゲーム

それぞれの和が 0⇒zero sum game

☆一定和が 0 より大⇒両者共に得する場合アリ 易

一定和が 0 ⇒一方が得た分、他方は失う

一定和が 0 より小⇒負債の押し付け合い 厳

Case.2) payoff matrix 2 参照

[ゲーム設定] A: 銭形警部、B ルパン

A の strategy: a1…B を指名手配

B の strategy: b1…A と対決

; a2…犯行予告現場に張込

; b2…海外逃亡

<payoff matrix 2>

player		B	
A	strategy	b1(対決)	b2(海外逃亡)
	a1 (指名手配)	+2 -2	+1 -1
	a2 (現場張込)	+5 -5	0 0

※表中各々のセルの和は 0…zero sum game

☆合理的思考において、このゲームの解はいかであるか

※優越戦略 (dominant strategy) …失敗した場合に着目 (最大の損を考える)

→その時の利得が小さくない方を選ぶ

→mini-max 理論 (Max 戦略)

A…a1→+1 or +2 a2→0 or +5 ∴ dominant strategy…a1

B…b1→-5 or -2 b2→-1 or 0 ∴ dominant strategy…b2

以上より唯一解として (a1, b2) を得る。 (鞍点 (saddle point))

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

134. 二人非一定和ゲーム

Case.1) payoff matrix 3 参照

[ゲーム設定] A、B…暴走族 strategy; 突進 or 回避

A と B がオートバイに乗って向かい合い、突進

先に避けた方が負け(但し、どちらも避けない場合衝突し両者死亡)

<payoff matrix 3> **chicken game** — [編集注:03、06 年出題歴アリ]

player	B		
	strategy	b1(突進)	b2(回避)
A	a1 (突進)	-10 -10	+5 -5
	a2 (回避)	-5 +5	-1 -1

※表中 cell ごとに和が異なる

A…dominant strategy— a2 \longleftrightarrow —でないのは a1 のときのみ

B…dominant strategy— b2 \longleftrightarrow —でないのは b1 のときのみ

☆chicken game…合理的選択をすれば必ず pay off は負の値をとり、正の値にするためには非合理的選択を要するような game

ex) 暴走族…合理的行動で弱虫扱い、各自が利得を求めると死亡(→dilemma)

Case.2) payoff matrix 4 参照

[ゲーム設定] A、B…麻薬の売人(取調中) strategy; 黙秘 or 自白

別個に取り調べられるも、物証ナシ(自白のみが頼り)→司法取引

双方黙秘⇒釈放 (但し疑いは残る)

一方が自白⇒自白した方のみ酌量、もう一方は量刑大

双方自白⇒通常通りの刑期

<payoff matrix 4> **prisoner's dilemma** — [編集注:04、05、09 年出題歴アリ]

player	B		
	strategy	b1(黙秘)	b2(自白)
A	a1 (黙秘)	+10 +10	-5 +15
	a2 (自白)	+15 -5	0 0

A…dominant strategy— a2

B…dominant strategy— b2 \longleftrightarrow 双方黙秘なら両者+10

※(a1,b1)となるのが player には最もよい選択(この方が合理的)

→なぜ dominant strategy と異なるか

column:ちょっと脱線

古城先生の授業で使える話

①から導くのがナッシュ均衡

②から導くのがパレート最適

→300 番台で詳述する

☆(a)非協力ゲーム…A と B の協力関係を前提としない…①

→優越戦略—この思考法に則った戦略

(b)協力ゲーム …A と B の協力関係を認める…②

→(a1,b1)の解を採ること可

※prisoner's dilemma…非協力ゲーム(個人の合理性追求)とするか、

協力ゲーム(集団の合理性追求)とするかで結論異

→別個に取り調べられるため、相手を信用するか否かで dilemma の発生

134.n 人ゲーム—n 人非一定和ゲーム— $[n=\{n \in \mathbb{Z}, 3 \leq n\}]$

Case.1)payoff matrix 5 参照

[ゲーム設定]player…3 人 strategy;法案、修正案、現状維持の 3 種

3 人は平等とし、合議制で決を採る

<payoff matrix 5>

	payoff		
	strategy		
player	h(法案)	s(修正案)	g(現状維持)
A	10	4	0
B	0	8	6
C	5	0	9

※各案に一人ずつ分かれ、採決不能(非協力ゲームとすると解ナシ)

→連合(coalition)<player 間の協力>方法を模索

1. $\overline{A/B/C}$

※//…分裂

2. $\overline{A,B/C}$ or $\overline{A/B,C}$ or $\overline{C,A/B}$

—…協力

3. $\overline{A,B,C}$

※1 は考慮対象外

3 は過大規模連合(必要以上に大規模な連合で、非合理的)

2 を考察する→最小勝利連合(minimum winning coalition)

→各人の獲得する利得の最大化を模索

(3 人での多数決⇒2 人で十分)

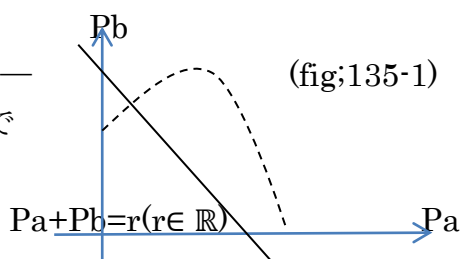
※以下、このプリントでは、表記の簡略化のため、「x の獲得する pay off」を P_x と表記することとする

☆思考法

(a)利得領域—線形計画法的考察—

(fig;135-1)のように座標平面上で

各 player の pay off を考察



注意)左図は講義のものと異なりますが、内容には影響しないので気にしないで下さい。理由を知りたい方は質問して下さい。

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(b)特性関数(characteristic function)

→その連合の力だけで獲得できる利得の量を表す関数

A,B... $P_a+P_b \leq 12$ → 非合理的

B,C... $P_b+P_c \leq 15$ → cf)標準形

C,A... $P_c+P_a \leq 15$ → 合理的 → C が A、B のいずれと連合するか

→利得行列を書く

→core が一点に定まらず

→side payment の考慮(利得の多い方が少ない方にどれ程回すか)

Case.2) payoff matrix 6 参照

[ゲーム設定]Case.1 に同じ(各 player の利得は異なる)

<payoff matrix 6>

	payoff		
	strategy		
player	h	s	g
A	7	4	5
B	0	5	6
C	5	3	4

A,B... $P_a+P_b \leq 12$

B,C... $P_b+P_c \leq 12$

C,A... $P_c+P_a \leq 15$ ◎ 唯一解(saddle point)

☆core...ある戦略 or 複数戦略の組合せから生成—①

他の連合により優越(override)されない—②

①∧②をみたす利得の組合せ

136.批判

(1)pay off の数量化に対する批判

pay off...数量化難の事象多(ex.沖縄の米軍基地問題)

∴数量化の条件—

- ①価値の一元化(価値判断基準を一つに定める)
- ②価値判断基準が測定可能である。

→設定方法 or 設定自体で紛糾

(2)Communication—協力 or 非協力—

人間関係...all or nothing で考察できず

→現実では player の関係が協力と非協力の中間である case 多

(3)合理性

人間活動...必ずしも合理的とは限らない(ex.原発職員、自衛隊)

→合理的人間を前提とする理論の基盤自体不明瞭

200.政治的人間の理論

201.政治的人間の思考展開

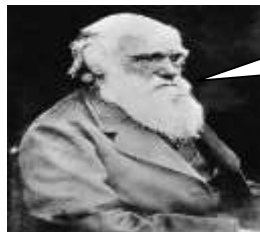
(1)キリスト教

人間=神の似姿(cf.112-(a))

(2)J.Rocke

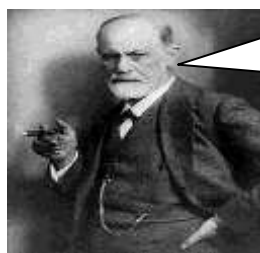
自己決定的人間観(cf.112-(b))

(3)C.Darwin “Origin of Species”(1859)



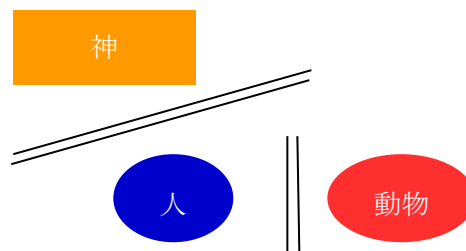
進化論…人間も他の動物同様、動物の一種にすぎない
→人間=最高の発達段階にある動物(∴「精神」の存在)

(4)S.Freud



人間…精神・理性アリ
↕
精神の深層に本能・無意識アリ(人間—これらにより支配)

<fig;201-1;(2)迄の世界観>



<fig;201-1;(3)迄の世界観>



<fig;201-1;(4)迄の世界観>



p19~26 の 200 番台は試験範囲外
だから注意してねっ。
注)p21~23 は 330 番台で使うよ。
(by RDSK)



202.Freud の人間観

※以下 300 迄、試験範囲外(2011 年は取扱ナシ)モノズキな勤勉な人のために過去プリントを適宜引用・補正

結構手抜きなので、学びたい人は過去シケプリや文献を当たって下さい。

(1)心の構造

<fig;202-1;Freud における心>

1. **イド(Id ; It)**—生来有する、人間の心の奥底に潜むエネルギー

イドの発揮→衝動(欲動)(drive)—人間を駆り立てるもの=本能(impulse)

満たされない衝動(本能)の充足をめざしイドが力を発揮

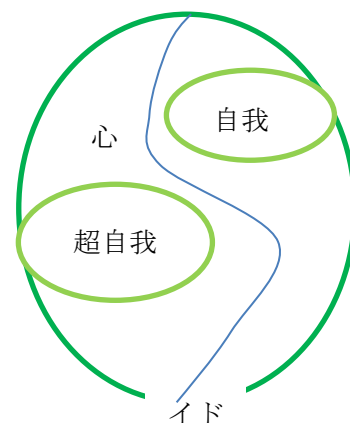
※基本衝動は以下の二つから成立

(a) **Eros** :人間が生きることを求める衝動(←libidoで動く)

→生の欲求、性の欲求、自己保存の欲求等を満足させようとする本能

(b) **死の欲求**:自分の世界の破壊を図る(a)と逆の衝動(←thamatosで動く)

→イドが直接周辺に発揮されれば、社会不成立



2. **自我(ego ;self)**

→イドの中で外の世界と接触する部分が発達して形成

→イドから生じる様々な欲求を制御し外界に働きかける部位(二種の機能)

(a)意識的機能

ex)空腹時に目前に食べ物を発見するも、腐っていそうだったため行動を中止

=空腹という欲求を嗅覚という知覚で抑制

※ego—「知覚」、「学習」、「記憶・経験」でイドを制御する機能をもつ

(b)無意識的機能

※ego—無意識に自我を防衛する機能をもつ

∴欲求不満で自我が傷つくor超自我の命令を守れないと自我が傷つく→詳細は(3)-2.防衛機構

3. **超自我(superego)** [編集注:04、09 年出題歴アリ]

→自我の一部が自我から分離し形成、社会の倫理的基準が内面化(=自分自身でも納得する)

(a)批判的機能(=罪悪感・良心の呵責)

ex)「勉強し好成績を修めるのはよい」という倫理的基準内面化

⇒試験前にゲームをしていると自己を批判

※超自我は自我を批判する存在として機能

(b)自我理想(理想我)(idol)

「自分はあのようになりたい」という理想的な自分を決定

→イドからの様々な衝動から自我を守り、理想の方へ自我誘導

命令として作用

(2)心の働き

人間の心—意識して働いている部分(conscious)と無意識に働いている部分(unconscious)

→両者の間に前意識(preconscious)(自分で努力して集中すれば意識できる部分)

cf)精神分析学 (unconscious)を探るためにフロイトらによって発達(→夢判断、連想法etc.)

(3)重要概念

1.外傷(trauma)

→心に非常に大きな傷を与えるような経験

→意識的に処理できない→自我を守るためこれは無意識の方に押し込められる

2.防衛機構(defense mechanism)

自我→非常に容易に傷つく(イドからの衝動の抑制、超自我からの命令の未達成)

→傷ついた際自我は無意識に心の防衛機構を作動(意識してその傷の修復を図る⇔言い訳)

a.抑圧(repression)

→望ましくない、処理できない衝動を意識から外す(自分にそんな衝動は存在しないとする)

b.置き換え(displacement)

→抑圧された感情が本来の対象から離れて他の対象へ移行

ex)ふられる→エロスの持つ力を代理の対象(勉強・運動・娯楽etc.)へ転嫁

c.反動形成(reaction formation)

→無意識の衝動を、自我により認められる正反対の衝動に変化

ex)A氏:面倒をよく見てくれるX氏がいるが本心ではX氏を疎ましく思う

→A氏はX氏を本当は憎むが、自分がX氏を憎むということを意識の上で認められない

→X氏を非常に尊敬したり感謝したりするといった全く逆の感情をA氏が有する

d.隔離(isolation)

→自我が傷つく体験をし、覚えていると辛いので自分の辛い感情をその体験から隔離

e.同一視 (identification)

※identification は多様な意味をもつが、ここでは防衛機構の一つとしての意味を見る

ex)ある人の命令への絶対的服従を要される、隷属状態を仮定(=自我が非常に傷つく状態)(ex.政治家と秘書)

→ここで「あんな奴のために何でこうしないといけないのか」と考えれば自我が傷つく

→「先生と自分は一心同体で、自分のためでもある」と考えることで防衛機構が機能

∴同一視…無意識下で支配者と自らを同じものとみなす

f.合理化 (rationalization)

→行為の正当化のため、最もな理由や社会的に認められる理由を作り、真の理由に代える

cf)「sour grape の論理」(イソップ物語): ある晴れた日、くいしんぼうのきつねさんが歩いていると、木の上におぶどうがなっていました。手を伸ばしても届きません。どうやっても届きません。きつねさんは去り際に捨て台詞を吐きました。「あのぶどうは、すっぱいに決まっているさ」

↑本当の理由=届かないbut認めると自我が傷つく→「酸っぱいに決まっている」と正当化

※フロイト:なぜ政治家・官僚になりたがるかを、フロイトを踏まえて説明した政治的理論を見るため講義

b の例は「昇華」では?
それはさておき、こういう
気分はよく分かります。よ
くあることです。
まあ、それもまた人生。

210 政治人 (political man) の理論

(1)H.D.Lasswell “Power and Personality” (1948)

→フロイトの精神分析理論を政治学に導入

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(2) 政治人の理論と人間行動

B=f(o) B=Behavior(行動)、O=Organism(生活体(生命体))

Organism;行動科学でよく使われる言葉 人間と動物全てにおいて、複雑な反応をするもの
これまで人が政治家になりたいと思うのは、**interest**や**influence** によるという議論を学習
ここでは、行動がその人の**Organism**の特性(本能・無意識など)に支配されると考え理論展開
☆非合理的人間観を初めて政治学に持ち込んだ理論

211 政治人の概念

(1)Lasswellの思考法



Harold D. Lasswell

1.政治(制度及び機能)

※ここでの政治…我々の生活の中の具体的な政治に限らない

→一見具体的な政治ではなくても、政治的な制度・機能を持ったものは多く社会に存在

ex)クラブ活動→役割の発生(調整役、まとめ役...etc.)(=機能として政治的)

家族→対立、利害調整もあり、力を合わせて物事をやり遂げることもある

(=機能として政治的)

2.政治人

→人間行動の一側面(→具体的な人間)

cf)人間行動の中から経済に関わる部分だけを抽出⇒「経済人」

同様に「人間行動から政治的機能を果たす側面を抽象化したもの」=「政治人」となる

→目標決定、説得、構成員統合etc.をする人は全て政治人として捉えられる

(2)Lasswellの社会観

1.定義

社会において人間は**資源(resources)**に基づき**制度(institution)**を通じて**価値(value)**を追求

・**資源**=最終的な価値を手に入れるための手段(cf.政治資源→121・(2)・(c))

・**価値**=自分が望ましい・欲しい・意味があると思えるもの(人により異なる) =「定型化された行動様式」

・**制度(institution)**=(組織(organization)や規則(rule)とは全く異なる)

ex)日本において知識を得る方法

8c:命がけで唐に渡る→18c:寺子屋に行く→21c:大学へ行く

☆このように、特定の価値を手にするための行動が定型化(→制度)

cf)制度は以下のように登山に例えられる(山の頂上に価値が存在するとする)

昔;試行錯誤しながら登山(いくら資源を用いても価値が得られるとは限らない)

→社会の進歩;その山に登山ルートが形成→先人たちの道を辿れば十分

→価値を手に入れるための定式化された行動が形成

2.説明

制度にはそれに対応する(それによって作られる)価値が存在

※ビジネス→富の獲得、専門技術職→技能etc.定型化された行動様式の中で価値獲得<Table;211-1参照>

政治についても同様 cf)Lasswell:政治という行動様式を通じ、「人を支配する力」としての権力を得る

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

<Table211-1;制度と価値の対応>

制度	価値
ビジネス	富
専門技術職(職人仕事)	技能
病院	健康
家庭	愛情
政治	権力(power)

212. 政治人の定式化

「政治人」— 一種の類型化により成立(Lasswell…権力に着目し、人間を見る)

→具体的人間に対して一番目立つ側面や一番熱中する側面を取り上げることで把握

(1)類型

「他のどの価値より権力を重視する」類型が政治人(他を犠牲にしても権力獲得を望む人)

cf.)政治人が価値に序列をつけることを前提とすることに注意

→序列がつけられない人は非合理的人間として排除

注意)「政治人」は政治家に限らない
→権力を最重要視する全ての人間

(2)

価値:人によって千差万別 ↔ 他を犠牲にしても人に命令・支配することを一義的に追求する人

→背景が存在→以下の式で表現

$P = p \{ d \} r$ [編集注:01、08年出題歴アリ]

P : Political man (政治人) } : 変換記号 (左辺を右辺に置き換える記号)

p : private motives (個人的動機) : 社会とは無関係なその人個人の動機

「幼少時の家庭環境が個人的動機を生み出す」 (by Lasswell)

cf)エディプス・コンプレックス(男の子は母親を巡って父親と潜在的敵対関係にある)

※コンプレックス=相反するような複数の感情が入り混じったもの

同様にエレクトラ・コンプレックス(女の子は父親を巡り母親と潜在的敵対関係にある)も大

(但し、女性参政権がないという背景もありLasswellは後者を考慮せず)

しかし、個人的動機を理由に政治人になることは周囲が認めず→p を変換

d : displacement(置き換え)

防衛機構の”置き換え”同様p (個人的動機) を他者も認めるpublic interestに変換

r : rationalization (合理化)

public interestを合理的理由で持って正当化

※権力追求者…個人的動機を公の目標に置換し、公共の利益による合理化で政治的人間に転化

213 類型学

(1)Lasswellによる政治人の類型

Lasswell…性格型と政治的類型を対応<Table;213-1参照>

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

<Table;213-1;性格型と政治的類型>



性格型	政治的タイプ
強迫型	官僚 …鬼の教務課
劇化型	扇動家
冷徹型	外交官・仲裁家…仏の支援課

(2)説明

cf.)Lasswell :政治家でなく裁判官を調査

∴政治家…落選確率高→継続的観察難∧裁判官…選挙制ゆえ政治性を有する

Lasswell —家庭環境と日常行動を調べ、性格型を導き(1)の表に適用

1.強迫型(compulsive)

家庭環境…裕福∧社会的地位高

父親—厳格で冷淡、母親—気取り・堅苦しい(場合により、年が2、3離れた兄弟と競争アリ)

→子供は幼少期から愛情と賞賛に飢える→強迫的性格

→物事や人間関係を画一的に処理、融通がきかない、暖かみに欠ける

ex.)全て規則に従って物事を行う、自分の権限が他人に侵されるのを嫌う etc.

→官僚に適す(ex.「あなたとは違うんです」の某元首相)

2.劇化型(dramatising)[編集注;07、09年出題歴アリ]

家庭環境…内部で波乱

父—ブルーカラー・下級労働者、母—小学校教師(中流階級)、婚期に焦り結婚

→母親—「自分は本来送るべき人生を送れていない」と配偶者の社会的地位に不満

→子供に対し父親を反面教師にして指導「パパみたいになっちゃダメよ」

一方父親は口げんかでは勝てないためDV の発生

→子供は人の感情の動き・場の空気を読み取るのがうまくなる

(どちらにも気に入られたい)→**劇化型性格**

→扇動家に適す(ex.「感動した!」の某元首相)

ex.)自己顕示欲強、細かな点で雑but全体を見通す力あり、多様性、新しいものが好きで順応が得意



cf)ヒトラー…父母年齢差大

→母:生計のために結婚、父:DV アリ

ベートたけし…父:アル中・DV アリ

※扇動家とコメディアン

(↑類似の家庭環境あり)

→人に気に入られる必要がある点で共通

→**劇化型性格タイプ**が多い

3.冷徹型(detached)

データが少ないため家庭環境の詳細不明

怒りや愛という感情を殆ど持たず、いつも冷静・冷酷で無慈悲である傾向

→激動の時代を冷静に生き抜ける→外交官、仲裁者向き(ex.タレーラン)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

214. 批判

(1)歴史的制約

※power seeker(権力追求者)—権力という価値をあらゆる価値より強く追求する人
19~20Cには一定の有効性(ex.ヒトラー、ムッソリーニ、スターリン等power seeker存在)
→21c には目立たない(特に先進諸国ではpower seeker が消え去る程democracyが進展)
→今はpower seeker を考えるより、democracyの中で働くleadership の問題を考えるべき
(Lasswell の議論は19c 末~20c 初を対象にするという歴史的制約を持つのではないか)

(2)elite主義

権力人—一部の特殊な人(←一般人)
→権力者にだけ注目した議論は一種のelite 主義に立つ
→しかし、政治自体はelite主義から一般大衆を扱う理論へと転化
→権力追求できるのが一握の人間だけとするelite主義に基づく議論は一般大衆を考慮せず不適

(3)Freud的人間観

Lasswell…心理学を政治学へ導入した点で評価可

butフロイト的人間観に基づく議論—非常に特殊性強

∴幼少期の家庭環境にのみ注目、organismとしての人間の特徴にしか注目せず

→学習や他者の意見を聞くなど、幼少時の家庭環境とは別に、バランスのとれた判断が可能になる要素アリ

※Lasswell の分析は人間を単純化しすぎているのではないか

220. personality と政治の理論 —F.I.Greenstein

(1)起源

パーソナリティ心理学(Lasswell より複雑化)

「政治的人間の心理と行動」(Greenstein)

(2)personality と人間行動

1.環境に対してその人が持つ性質に応じて選択的に反応

但し、完全に自由な選択ではない(同様の環境下でも同じ影響を受けるとは限らない)

↑規定

2.生活体(Organism)としての性質

$B=f(O,E)$

B : behavior

O : organism

E : environment

(注)1. organism ≡ 人間・動物

行動科学的見方による。どちらも条件づけ可能。ex)パブロフの犬状態

2. 無意識や本能は環境によって与えられている

ex)家庭環境による子供の変化

221. *personality* とは何か

(1) 基本的な考え方

SOR 図式 $S(I) \rightarrow O \rightarrow R$ S : 刺激(Stimulus)
R : 反応(Response)

(2) 定義

1. 目で見ることにはできないが、現実中存在する(脳のどの部分が司っているかもわからない)
2. いくつかの部分に分かれている(認知・感情・思考・自我同一性の規則性)
3. 多様な刺激を受けたときの個人の行動の規則性

222. 政治行動の基本仮説

(1) $E \rightarrow P \rightarrow R$ 図式[編集注:02年出題歴アリ]

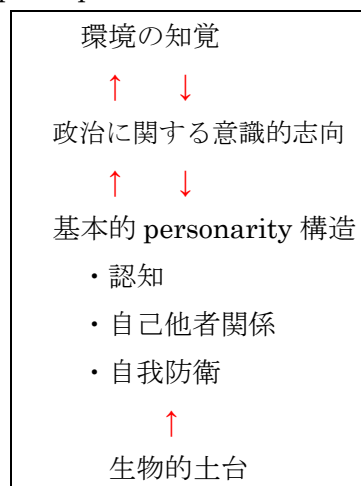
E : 政治 actor の環境
P : 政治 actor の素質 predisposition
R : 政治的反応

(注)1. 基本的に $S(I) \rightarrow O \rightarrow R$ 図式と同じ

2. predisposition が基本的に personality と同じ

(personality は多様な意味を持つため、公式に用いたくなかったと考えられる)

(2) predisposition



※・知覚=見聞きしたもの→それに対して判断は加えない

・意識的志向は、何を見聞きするかを選択

・意識的志向…自分でわかっていること

(例)意見 *opinion*、信念 *belief*、価値 *value*

イデオロギー(価値と信念の複合体)「こうあればいいからこうすればよい」

・自我防衛…自我が傷つくことを恐れ、合理化すること

ex) イソップ物語のキツネ「あのブドウはきっと酸っぱいだろう」

・生物学的土台…気質など生物学的なもので、変えることはできない

223. 特徴と批判

(1)特徴：方法論であり、様々な人の行動を整理するとき、それをどう扱うかを問題とする

(2)方法論としてよい点

・様々な level の異なる心理学をうまく取り入れている(例)認知、社会心理学、精神分析

・様々な case に応用可

a 単一事例

b 類型論…類型に分類すること

c 集団研究 ex)日本人の政治意識

(3)E→P→R 図式に対する批判

SOS 図式

Si→O→Sg

Si : 記号(sign)

Sg : 記号対象(significate)

→我々は刺激そのものに反応するのではなく、その中に隠された記号 sign を読み取る

224. 象徴的相互作用論の基本的な考え方

1. 個人や社会そのものにはあまり注目せず、個人と個人、社会と社会の関係

(interaction)に注目する

2. 人間の行動は、その人の視座構造 (perspective)によって決まる

=ものや出来事に対するある程度一貫した考え方

3. 視座構造は、周りの人との象徴の交換によって作られる

=ある出来事がその人にとって持つ意味合い

—次ページより試験範囲に復帰します—

☆閑話休題—ちよいと目を休めよう(駒場キャンパスの風景<著者撮影>)

(べ、別に作者が(以下略))—



<駒場図書館(放課後に著者降臨)>



<柏蔭舎*(火3 中心に著者出沒)>

300.政治集団の理論

301.集団(group)

ex)743 教室の暇人学生…集団、駅にいる人々…(集団)、センター街…一集団

☆集団の条件… ①共通の目標・関心を有する

②地位(status)と役割(role)の分化

→集団内での立場

→status に応じて定まるもの

cf)role からの逸脱→norm による制裁

ex)教官が教室に来るなり教卓の上で寝る→非難・処分

③We Consciousness[我々意識](一体感)

cf)集合体(collectivity)…自らの interest をもった、独立した個人の集合

※集団…纏まり全体への着目強

集合体…纏まりをなす個体への着目強

※集団の理論…group と collectivity の双方に注意しながら考察

302.集団の考え方の歴史

※社会理論・政治理論…近現代に至るまで集団の概念ナシ

(1)ギリシア・ローマ時代

・ギリシア…よりよいポリスを作るにはどうすべきか+個人はどう生きるべきか

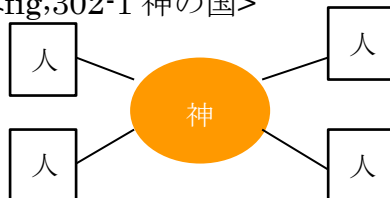
・ローマ …よりよい共和国を作るにはどうすべきか+個人はどう生きるべきか

→社会全体V個人に対する着目(社会を分ける「集団」の概念ナシ)

(2)中世

(a)キリスト教的世界観:Civitas dei…神の国

<fig;302-1 神の国>



→中心に絶対者である神が存在

→人間は神への敬愛(アガペー)で神と結合

→信徒間の分裂ナシ(∵信徒は直接神と結合)

→信徒が集団に分かれるという発想ナシ

civitas:共同体
dei :神(←Zeus)

(b)封建制…社会の上位から下位までが鎖状に結合

→上位の者が下位の者を保護

→下位の者が上位の者に忠誠

→階層構造(ピラミッド状の形成)

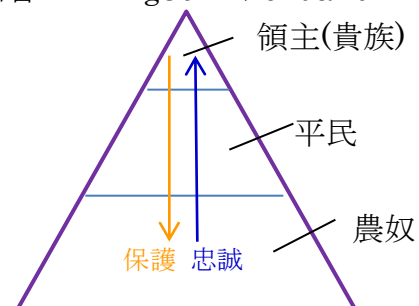
→社会有機体説の成立 cf.123-(1)

→支配者・被支配者間のつながり不可欠

各々がその役割を果たすことで社会成立

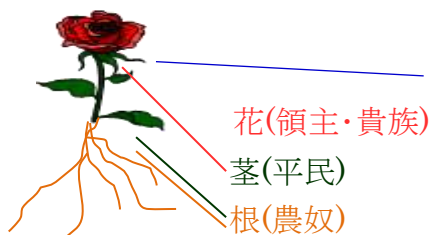
(一つの役割が欠けると社会が不成立)

<fig302-2:feudalism >



※feudalism…双務的契約関係
階層性身分社会

cf)花に例える中世社会(図は過去シケプリから拝借した)



<fig;302-3;社会有機体説>

各部分が有機的に結合
(一カ所でも欠けると×)
→社会成立のために、個々の
生まれつきの身分が固定さ
れることを正当化。

column:試験に出ない話

この前読んでいた石浦先生の本に
書いてあったのですが、スズラン
にやった水には猛毒が出てくるそ
うで、「きれいな花にはドクがあ
る」そうです。気をつけましょう。

※中世社会…様々な集団成立 ex)地域共同体(北イタリア諸都市など)

職人集団(ギルド)、商人集団

(3)近代前半

絶対主義国家の成立(cf.302-(4)-(a))

→圧倒的に強い力を用い、地域共同体・ギルド等抑圧

宗教と結合し正統性(orthodoxy)確保(→異端の弾圧、宗教戦争)

※中世以降実際に発達した様々な集団が強権により抑圧される

→集団側から、自分たちの利益(≠個人の利益)を守ろうと運動

→自然法理念の発達

高橋氏の「近代」の捉え方は
ちょっと変わっていますが、
見逃してあげましょう。

“legitimacy”では
ないことに注意

☆J.Althusius(蘭;1557~1638;政治・社会理論家)による理論



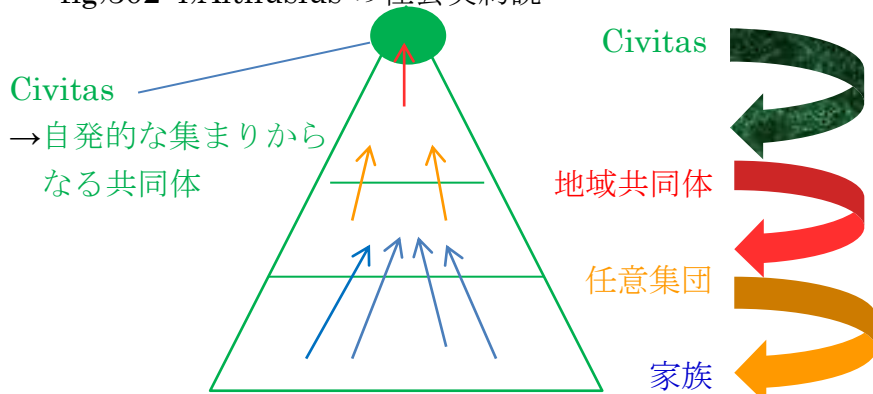
※形成背景…オランダ:商業の中心として繁栄、軍事力弱
→ハプスブルク家(スペイン)の支配下
→スペイン支配を撥ねようと理論形成

(a)[社会]社会契約説*(契約当事者=集団)

*Rousseau らによる社会契約論(契約当事者=個人)と異なることに注意

→Althusius:社会を層状とし、下位(基礎)の社会が上位の社会を支えるとする

<fig;302-4;Althusius の社会契約説>



※上位の集まりは下位の集まりのために形成される。

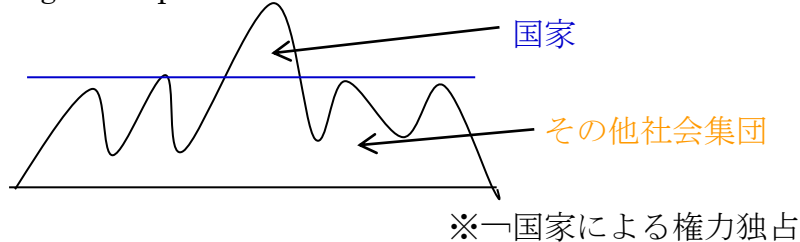
(b)[国家] **多元的国家論(pluralism)** [編集注:01,03,06,08,10 年出題(最多出題)]

→ 国家は特別な集団でなく、他の社会集団と並列して存在する、社会集団のうちの一つにすぎない、とする考え(但し、集団間の関係を調節するという点での優位性は認める)

→ 権力の所在:各々の社会集団に分散

※pluralism…政治理論上で、国家を特別な位置から引きずり下ろす
国家権力の強い国で ideology として価値アリ、主張多

<fig:302-5:pluralism >



市民社会論…communityに近い
↑
ドイツなどで盛ん
(∵上から抑えられる感覚強)
↓
国家論…stateに着目
Machiavelli 的思考

※Althusius 以後の時代…絶対主義～帝国主義の時代

→pluralism の重要性薄→埋もれた存在

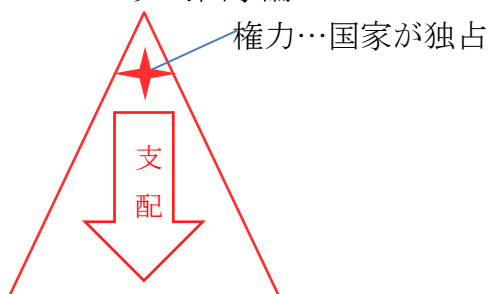
→19C;自由主義成立→英米の政治学において再発見

注意)講義で扱ったのは Althusius を発展させた理論

cf)一元的国家論(伝統的国家論)

→国家=最上位の集団(特別な存在)⇒権力…国家による独占

<fig:302-6:一元的国家論>



[一元的国家論を支える論拠とそれに対する反証]

※国家には加入脱退の自由がない

<反例>他国への帰化+自由ナシの集団は他にも存在

※国家には実力行使(ex 死刑執行)ができる

<反例>死刑廃止等の動向

※国家は永久的である

<反例>中央アジア諸国家の興亡の歴史

(4)近代後半

(a)絶対主義の政治理論(近代前半以降)(cf.302-(3))

・封建制から近代絶対主義国家への移行

小規模権力分立→大規模権力への集中

※移行の際に封建遺制(領主裁判権、徴税権 etc.)の発生→国家統一の障害

J.Bodin(1530-1596)



国家主権論提唱

→封建遺制における諸権利を超越する、最高の絶対的権力の存在を規定

→封建遺制における権利を否定

II

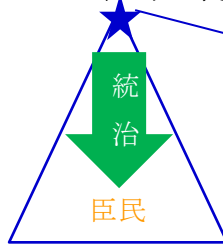
国家主権(絶対的権力)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

<fig;302-7;絶対主義国家>



絶対君主(主権保持)

※家産国家…領地内のものを王族の家系の財産とする
→家系を絶やさない必要(∴相続で混乱)
→家産国家の不安定な側面の一つ

☆絶対主義国家:封建制解体→絶対主義を止める存在ナシ

(b)近代政治理論

国家 VS 個人…強大になった国家から個人の権利を守ろうとする動き

[編集注;以下、(5)まで今年の講義にはなかったものの、著者の判断で補足します]

T.Hobbes J.Locke J.J.Rousseau らの社会契約論(契約当事者=個人)

→対等な個人が集結し、国家形成

→国家と、その構成員たる個人を保護

※個人と社会の間である「集団」については考慮されず。

(5)近代後半に至るまで「集団」の政治理論が存在しなかった理由

[理由](a)Elite 主義的政治観

→政治:権力を有する一握りの者が行うもので、一般民衆の関わるものでない

→社会 level でのものと考えられる

(b)平等主義的政治観

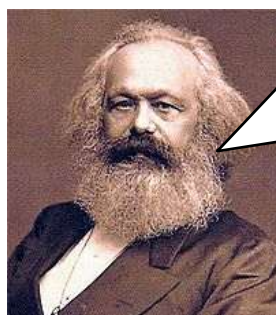
→政治:政治を動かす力を平等に有する個人により行われるもの

→個人 level でのものと考えられる

☆(a)、(b)いずれの場合も、「集団」というレベルは考えず。

303.Marxism—階級の理論—

※集団(階級(class))level を重視(社会が複数の階級に分化)



(1)階級分裂

社会…支配階級と被支配階級に分裂

※これだけでは分裂している階級間の関係性は不明

(2)階級利害(class interest)

→それぞれの階級に共通する状況から生じる要求・利害

→支配階級と被支配階級の利害は対立関係にある

<fig;303-1;階級利害>

支配階級(共通状況 S1)

対立

被支配階級(共通状況 S2)

(3)階級意識(class consciousness)[編集注;03,06,08 年出題歴アリ]

→階級利害を理性的に認識することで生じる意識→同一階級内での連帯感

→社会・歴史の理解要

→勉強・学習で習得

→歴史的・社会的使命感の発生

ex)プロレタリアート革命

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

☆Marxism

$G=f(Ir, Cs)$

G…group(集団)

Ir…interest(利害)

Cs…consciousness(意識)

※階級利害の理性的認識で、個々の階級意識が目覚め、連帯して階級が生じる

310. 集合的選択(collective choice)の理論—K.J.Arrow & M.Olson—

※以下における議論は **collectivity** に着目(一group)

※**collective choice**

→独立した個人の集まりにより下された合理的判断

→個々が合理的判断を下すことで、全体が向上するという思考

(cf. 古典的 liberalism、個人主義)

[編集注;以下の lemma は今年の講義になかったものの、著者判断で補足します]

lemma)liberal について一時代による変遷—

・18C 後半:liberal の成立

→宗教による制約に対して反発(当時の教育=宗教学校)

→公教育の宗教からの分離要求

・19C :身分制による制約に対して反発

→一部の人間の特権を廃止するよう要求

・20C :古典的 liberalism の浸透→さらなる service

→福祉国家・累進課税(welfare)追求

・20C 末 :service が行き過ぎとの非難

→市場経済の徹底(neo-liberalism anti-welfare)

→他者に迷惑をかけない限り何をしてよい

※neo-liberal の根底…collective choice の理論

311. 歴史的源泉

(1)近代の人間観 (cf.112-(b))

→J.Locke…自己決定的人間観

(2) 功利主義(utilitarianism) (cf.112-(b))

→J.Bentham(英;1748-1832)



人間は幸福を増大させるよう行動する

→快楽(=楽しみ)があり、苦痛(=苦しみ)がないこと

+最大多数の最大幸福(greatest happiness of the greatest number)

→可能な限り多くの者が最大限の幸福を得ることで、社会の幸福最大化
(社会における幸福の総和が最大の時を理想とする)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(3)J.S.Mill(1806-1873)[編集注:Mill は第2問で過去3回の出題があります]



各人が私益を追求して良い社会になるのか(分裂しないか)
→Bentham の理論を再考する必要
→Mill: Locke、Bentham の議論を発展させる
※Bentham、Mill…古典的 liberalism
→各個人が私益を追求するのは正しい
社会は各人の幸福追求を抑圧してはならない

☆Mill の思考法

<第一段階>人間の意志…個人的利益により決定(liberalism の原則肯定)

※但し、広い社会の中には、社会全体を考えて行動する人も少数だが存在

<第二段階>人が私益に従って意志決定する限り、その決定は分裂し、一致しない

but 全体のことを考える少数の人…利益一致

ex)四国と本州の間に橋を架ける→勝手にやると無数に橋が架かる

but 合理的なものは一致

→全ての人々が討議に参加し、正しい決定がどれか考える

<第三段階>討議を重ねる中で、正しい決定が教育(propaganda)される

→全体が正しい決定に到達する

→この過程を経た後に多数決をとる→正しい選択が決定される

∴多数決は合理的である

<結論>多数決の意義

=個人の利益の寛容(尊重)∧全体として良い社会の成立

注意)Mill が考える「多数決」(討議を経て、全体の利益を得る手段)

→いわゆる「多数決」(小学校、中学校...)のものと異なるもの

cf)熱慮(討議)民主主義(*deliberative democracy*)[編集注:06、10年出題歴アリ]

現在流行の概念(多数決のあり方、討議の重要性の検討)

→市民が積極的に政治参加し、声を上げる

(背景)neo liberal への反対

現代社会で *deliberative democracy* の条件が整う

=情報・通信手段の発展(市民が情報を得、討議しやすくなる)

cf)e-democracy…*deliberative democracy* のうち、インターネットを使ったもの

column 他科目と繋げてみる

e-democracy が出てきたので、近現代史と繋げてみましょう。

中東革命でなぜ民衆の結束が強まったか考える際、インターネットの役割が大きな要素となります。人々はSNSなどを用いて情報共有し、規制の網を潜ってデモの結束を果たすことが出来たのです。

ref)近現代史第2講 中東大乱

注意)propaganda の意味
現代では負のイメージ
(∵ナチスの思想戦略など)
but 元々は「教育」の意

補足)用語注釈—liberal の意味—

(1)語源

中世ラテン語…liberalis→中世英語…liberal(語尾欠落)

(意味)free(man)…拘束を受けない、自由な人間に適した者

→一般人でなく、gentleman(貴族ではないが、裕福な教養人)

※一般庶民 …教育ナシ、職人修行→一種の仕事のみ身につける

gentleman…教育アリ、一つの仕事、ものの見方にとらわれない

(固定観念からの解放)

(2)18C 後～20C 初

古典的 liberalism(traditional liberalism)

イギリス…後発国家(ドイツ、日本 etc.)と異なり、国家の干渉少

ex)東インド会社;民間、植民地経営

cf)laissez-faire「為すがままにせよ」=自由放任

自由放任…一無秩序 but 権力の干渉を排し、民間の活力を解放する

cf)絶対主義国家…国王の一存で処刑・収監可

cf)Adam Smith…小さな政府(夜警国家)

→国防と治安維持のみ

☆政治思想としての traditional liberalism

①自分とは異なる他人の意見や行動を尊重し、受容する

(これにより、自らの意見や行動の尊重も保障)

②個人の権利の尊重<freedom>

(個人が自分の好きなように思考し、発言し、行動する権利)

(3)20C 後～

neo-liberal の登場

20C 前半の先進諸国…大きな政府 { 全体主義;国家が全てを仕切る

福祉国家;国家が国民の面倒を見る

neo-liberal…小さな政府 but 強い国家(法、軍事 etc.)

ex)イギリス;サッチャー政権

*リーマンショック…neo-liberal が社会・経済を制御できなかった典型例

→neo-liberal の時代の終焉か(?)<by 高橋先生>

※以下、古典的 liberalism に則る Mill の理論が正しいか否か異なる視点で考察
(私益追求により本当に正しい社会が形成されるか)

312. 基本的思考法

注意)ここで扱うのは **collective choice** の理論

—group

→利己的で独立した個人の集合(we consciousness ナシ)

このことに注意すると、下式

$G=f(a)=\sum Id$ が基本となる

G…集団=集合体(collectivity)

Id…individual

Σ …総和

※集合体は、利己的で独立した個人の総和(集まった)ものだという意

313. K.J.Arrow —一般不可能性定理—

(1)前提—数理経済学的思考—

・物事を決める際に、複数の選択肢(alternative)から 2 つずつ取り出す。

このとき、選択は以下の 3 通りのいずれかに定まる

[x,y を選択肢として]

- | | |
|-------------|------------------------------|
| · $x>y$ | …選好(preference) (y より x がよい) |
| · $x<y$ | …選好(preference) (x より y がよい) |
| · $x\sim y$ | …無関心(indifference) (どちらでもよい) |

注意)>は選択を表す記号である(不等号>とは異なる)

無関心は、「どちらでもよい」という選択を認めないと、個人に一定の選好を持った選択を強いることになり、個人の自由が尊重されないため、存在する(無関心≠判断不能であることに留意せよ)

Case Study)3 人の人間 K,T,M が collectivity をなす

旅行でどこに行くか決めるとする(collectivity による決定要)

Alternatives)x:川 y:山 z:海

仮定) K… $x>y>z$

T… $x>z>y$

M… $y>z>x$

このような状態においていかにして決定を下すのか

(2)Arrow 以前の理論

※このような思考は、絶対王政など個人が全てを決定する場合には不要

→フランス革命期以後になって理論成立(この時期以降に着目する)

(a)Condorcet(仏;1743-1794)—単純多数制—



選択肢を 2 つずつ取り出す(考察易化のため)

→上記の例を用いて x と y を比べる→K と T が x、M が y ∴2 対 1 で x

→次に、x と z を比べる→K と T が x、M が z ∴2 対 1 で x

→以上より、x が Condorcet 式の winner になる。

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

※y と z も同様に比べると、全体として $x > y > z$ を得る

<問題点>Condorcet 式の方法では、選択順序のみが着目され、選好の強度は無視

→M が x を特に避けようとしている(\because カップが出る)ときどうするか

(b)Borda(仏;1733-1799)



選択の順序に対して点数をつける

→上記の例を用い、1 位に 7 点、2 位に 4 点、3 位に 3 点与える

この時 $x=17$ 点、 $y=14$ 点、 $z=11$ 点となる

$\therefore x$ が winner、 $x > y > z$ が成立

※選択順序だけでなく、選好の強さにも配慮

※Borda の理論…日本の比例代表選挙に利用

<問題点>各順位の得点が固定されており、各人の選好強度の反映はまだ不十分

→Mにとって、カップが出る x に 3 点入るのは理不尽→どう対処するか

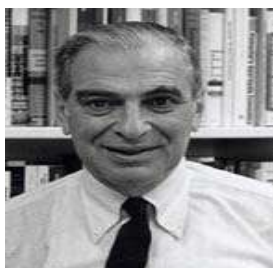
(c)持ち点方式<現在一般的な方法>

→各人が一定の持ち点を有しており、それを好きなように各選択肢に配分

ex)日本レコード大賞、日本カー・オブ・ザ・イヤー(※後者は特殊な方式)

<問題点>各人の持ち点が同じで良いかどうか(持ち点も変動すべきではないか)

(3)Arrow の 6 条件



<K.J.Arrow 米;1921->

(a)連結律(connectivity)

→任意の 2 選択肢を考える際、その 2 つは必ず比較可能である

($x \square y$ としたとき、 \square には $>$ 、 \sim 、 $<$ のいずれかが当てはまる)

⇔比較可能の条件

(b)推移律(transitivity)

→任意の選択肢において、 $x > y \wedge y > z \Rightarrow x > z$ が成立

(循環順序を避け、論理的整合性を保つ)

⇔論理性の条件

(c)領域無制約性(unlimited domain)

→個人は全ての選択肢に対し、どのような選好順序を示してもよい

(選択の際、他者から干渉を受けない)

⇔liberalism の条件(抑圧すると全体主義化)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

注意)高橋先生は「パレード」と
書くなと仰っていました。
(結構強調した年もあるとか)

(d) **パレート最適(Pareto optimum)**[編集注;01、06年出題歴アリ]

→集合的選択は、その集合体を構成する各個人の選択を可能な限り尊重すべき

(補足:答案に書く必要なし:集団内の誰かの効用を犠牲にしなければ他の誰かの効用を高められない状態)

ex)999人 $\cdots x \sim y$

1人 $\cdots x > y$

⇒Pareto optimum に基づき $x > y$ ($\neg x \sim y$)

⇔democracy の条件

(e) **無関係対象からの独立性(independence of infeasible alternatives)**[10年出題]

→多数の選択肢の中から、選択肢を限定して考えても選好順序には影響しない

⇔分析的理性に則り、選択肢を限定して考察できる

※無関係対象 \cdots 多数の選択肢の中から、考察易化のために落とされた選択肢

ex) $x > p > q > y$ $\xrightarrow{\text{p, q 落とし}}$ $x > y$ *論理的矛盾ナシ

※分析的理性 \cdots 多数の選択肢があるとき、幾つか削り考察易化できる

(f) **非独裁性(non dictatorship)**

→ある1人の選好が他者の選好に優越することはない

ex)999人 $\cdots x > y$

1人 $\cdots x < y$

この時選好は $x > y$ となる($x < y$ にはならない)

[column]Pareto optimum と Nash equilibrium—prisoner's dilemma に着目して—
<picture:Pareto(左側の写真)と Nash(右側の写真)>



(V.Pareto;伊;1848-1923)



(F.Nash;英;1928-)

player		B	
		strategy	
A	a1 (黙秘=協力)	b1(黙秘=協力)	+10
	a2 (自白=裏切)	b2(自白=裏切)	-5
	a1 (黙秘=協力)	+10	+15
	a2 (自白=裏切)	+15	0
		-5	0

<パレート最適>

集団内の誰かの効用を犠牲にしなければ他の誰かの効用を高めることができない状態

(\therefore パレート最適解は **CC**)

※各 player の選好: **DC > CC > DD > CD**(前者が自分の選択、後者が相手の選択)

注意)囚人のディレンマで、パレート最適とナッシュ均衡は一致しない

<ナッシュ均衡>

他の player の戦略を所与とした場合、どの player も自分の戦略を変更することによってより高い利得を得ること

ができない戦略(\therefore ナッシュ均衡解は **DD**)

(4)一般不可能性定理

PROBLEM)各人の選好が以下のような場合はどうなるのか

$K \cdots x > y > z$

$T \cdots y > z > x$

$M \cdots z > x > y$

→Condorcet 方式・Borda 方式ではどの選択肢も 2 対 1 で否決

持ち点方式で結果が定まったとしても正しさは疑問が残る

→**投票者のパラドックス(voter's paradox)** [編集注:02、04、07、09 年出題歴アリ]

→この paradox が発生したとき、Arrow の 6 条件を全てみたせるか

(voter's paradox は解決可能か解決不可能か)

→Arrow の解析…6 条件を同時に完全にみたすことは出来ない(=解決不可能)

→voter's paradox があるとき、その collectivity は合理的選択を行えない

→このような状態が導かれることを一般不可能性定理という

※解決には 6 条件のいずれかを緩める必要

ex)解決のために誰かの選好順序を変更させる(非独裁性に反する)

x、y、z のいずれかを排除する(領域無制約性に反する)

どれでもいいから無理矢理決める(パレート最適に反する)

[voter's paradox が生じる前提]

(集合体の人数) ≥ 3 \wedge (選択肢数) ≥ 3 \wedge 各人の選好における対称性

*voter's paradox が実際に生じた例を以下で確認する

(5)投票者のパラドックス(voter's paradox)の実例

Case)1955 年:アメリカ合衆国:連邦議会上院

<前史>南北戦争期:北部勝利…共和党優位(Lincoln 後の時代)

↓

20C 前半 :民主党北部派(支持基盤…工業労働者、進歩派インテリ)

民主党南部派(支持基盤…南部の保守的富裕層(農場主))

→1929 年世界恐慌以降、民主党が多数派になる

(背景)F.D.Roosevelt が北部派と南部派を結合

=Roosevelt coalition

∴民主党は北部派、南部派の 2 勢力を内包する

cf)現在における Roosevelt coalition の名残

→民主党が大統領を選出する際、北部派・南部派を組み合わせる

<本題>当時の上院の勢力分布は以下の通り

民主党北部派(N)…1/3

民主党南部派(S)…1/3

共和党 (R)…1/3

Problem) 国道(interstates)建設法案<目的:戦後復興、南北格差是正>

→道路建設を梃子にアメリカ経済活性化、インフラ整備などを進める

→デイヴィス・ベーコン挿入句が法案提出時に追加

(内容)interstates 網建設の際、労働者の賃金は地域水準で決定する
のではなく、連邦政府が一律に定める

(∵南部水準にすると南部振興に繋がらず)

→賃金水準は北部の水準に設定(高水準)

→南部の富裕層反発

∵これが適用されると低賃金農業労働者が建設業に流出

→賃金引き上げの必要、農場の収益悪化

→ここで、案として以下の3案が挙がる

・原案 (g)…挿入句アリ 一民主党北部派(N)賛成

・修正案(s)…挿入句ナシ 一民主党南部派(S)賛成

・廃案 (h)…法案自体却下 一共和党(R)賛成

→各勢力の選好順序が以下のようになる

N… $g > s > h$ (原案がダメでも国道は建設したい)

S… $s > h > g$ (南部の支持層を考え、修正案がダメなら廃案に)

R… $h > g > s$ (廃案にしたいが、修正案よりは原案がまし)

→**voter's paradox** の発生→どのようにするか

→L.B.Johnson の活動(後の大統領、議会運営に長ける、民主党南部派)



修正案を
通したい



ちなみに進振りを改革した前総長はこちら

Johnson…まず、 g VS (s or r)で決を採る



(S と R)対 N で s or r が可決される



次に、 s VS r で決を採る



(N と S)対 R で s が可決される

∴Johnson が望む結果となる

column)廃案にしてみよう

まず、 s VS (g or h)で採決



(N と R)対 S で g or h が可決



では、 g VS h で採決



(S と R)対 N で h が可決される
アレレ?

※**voter's paradox** 成立時には、選択肢を選ぶ順番により、投票結果も異なる

cf)前述の例では、一番最初に分離したものは1対2で敗れる

→負けさせたいものを最初に分離して、投票を進めれば結果も操作できる

※議事運営次第でどのような議決結果も得られる

→議事運営者の意図通りの案が可決される

→**経路依存性 (path-dependency)** [編集注:03年出題歴アリ]

=道理や討議ではなく、物事の道筋自体が選択を決定してしまうこと

cf)「問題がない限りは先例を続けていく」というのも経路依存性の一種である

☆**path-dependency**を防ぐための方策

⇔**voter's paradox**を防ぐための方策

→人数 or 選択肢 or 対称性のどれかを減らす(崩す)

→人数…削減難(殺すわけにはいかない)

対称性…変更難(無理矢理個人の選好を変えるわけにもいかない)

→選択肢を変える→どのように変えるか(具体例で考える)

ex)3人が旅行に行くとする

K…北海道の温泉、T…東北の温泉、M…沖縄の海

これが **voter's paradox** に陥ったときどうするか

→「温泉」or「海」の選択とみれば、選択肢を絞ることが出来る

☆**voter's paradox**をよく考慮せずに採決

→ごく一部の人間のみが望む議決結果となる

→**voter's paradox**には十分注意する必要アリ

314. 集合財(collective goods)—M.Olson—[編集注:10年第2問の出題範囲]



goods:財=モノ

→多様な形で存在

(ex.鉛筆、ボールペン etc.(具体的なモノ)

きれいな空気 etc.(目に見えないモノ))

ここでは、特殊なものについて考える

Olson は先生が
「大好きな理論」
だそうです。

<M.Olson;米;1910-1970>

cf)Olson…neo liberal でないが liberal である

→皆が合理性に基づき勝手に振る舞えばよいとは考えず

→neo liberal への antitithsis に富む

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(1)collective goods

財(goods)…人間の欲望を満足させる物的手段

cf)無形のモノも一種の goods と言える

→goods の分類

(a)個人財(private goods)…個人が所有し、その個人の欲望を満足させる
所有者のみ使用权があり、他人には使用权がない

※殆どのものがこれにあたる

(b)集合財(collective goods)
公共財(public goods)
共通財(common goods) } …集団の中のある個人が消費する際に、その集団に属するどの個人も消費できるような財

⇔消費の排除不可能性をもつ財

⇔消費の非競合性をもつ財

ex)空気、道路(公道)、公共輸送機関 etc.

(2)Olson による集合財と個人の選択

大規模集団が存在∧合理的個人がそれを構成⇒この集団で公共財は選択されず

<理由>[注:Olson は数式を用いて説明するが、講義では言葉を用いて説明する]

1.大規模集団における 個人の犠牲(cost)に着目

→個人が集合財を入手するため、cost を払うとする ex)節電のため冷房を切る

・大規模集団内では個人の行動の影響少

∴①犠牲を払ってもそれに対する賞賛ナシ

犠牲を払っても集合財が入手出来るか不明<不確実性>

一方、これも成立

②犠牲を支払わなくとも非難ナシ

犠牲を支払わなくとも集合財入手可

(ex.「自分が使っても他が我慢すれば…」)

※犠牲を払っても割に合わないということに注意

2.大規模集団における 個人の行動に着目

・大規模集団内では個人の行動は目立たない<不可視性>

→集合財入手に活躍したとしても賞賛されない

何もせずに集合財を入手しても非難されない

※どう振る舞おうが褒められもけなされもしないということに注意

3.合理的個人

→1. 2.を考慮すれば、合理的なのは cost を支払わない/何もしない ことになる

→free rider の出現[編集注:08 年出題歴アリ]

ex)電車にただ乗り

☆but 全体が個人の合理性に基づけば、集合財は入手不可

free rider というのは、俗に言う「薩摩守」のことです。

※Olson の解決策

- ①dictatorship…個人には選択させず、独裁者に一存する
→独裁者の選択により、集合財入手可
→Olson は liberalist ゆえこれは採用せず

cf)entrepreneur

=資本主義初期の起業家

→一方に資本を持つ者

一方に idea を持つ者

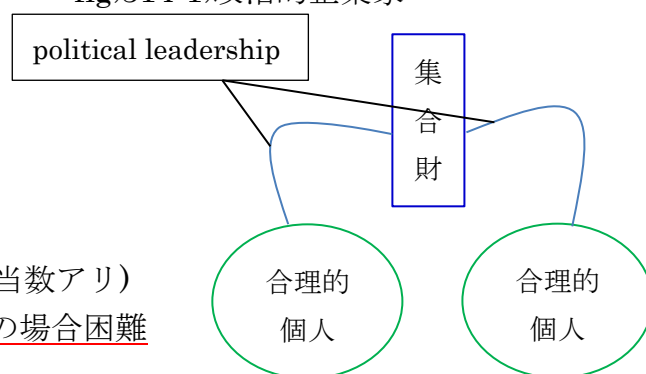
→両者を繋ぎ、事業を実現

②政治的企業家(political entrepreneur)[編集注;00, 04, 05, 09 年出題歴アリ]

→Olson:「個人の合理性を超越して集合体全体の合理性を考慮し、人々に集合財入手のための犠牲を払うよう呼びかけ、実行する人」の重要性を説く

→political leadership の問題

<fig;314-1;政治的企業家>



315. 特徴と批判

(1)精密な議論

Arrow・Olson…数理経済学者(→数理的分析)

→議論の論理性が整然としている

∴現実に起こらない可能性アリ (but 実例は相当数アリ)

※理論の原型をそのまま当てはめるのは大抵の場合困難

(2)合理的人間観

→人間は必ずしも合理的だとは限らない

(3)個人主義(個別主義)(individualism)

→個人を前提として、それを集めたものを考える(Σ:collectivity の理論)

=全体は個人の寄せ集めに過ぎないとする(=atomism)

cf)holism(全体論)…全体を考え個々はそれをなす一部だとする

→全体の中で初めて個人が機能

cf)社会有機体説(302-(b))

☆atomism の長所と短所

<長所>個人の意志決定の寄せ集め=社会の決定

→集団に対する個人の権利・自由を強調…liberalism の理論

(こうすることで、全体主義に陥ることを防ぐ)

<短所>徹底した個人主義ゆえ個人が完全にバラバラ

→勝手に意志決定するため、全体の決定が不可能

(but 実際には討議や対人関係で意見の変化アリ・決定可能

→理論として、人間の相互作用的关系への視座が欠落している)

※相互作用的关系を考えなかったから、理論が容易に進んだとも言える



p42~47 上部の 320 番台は、試験
範囲外だから注意してねっ。

(by RDSK)

320. 集団理論(group theory)—A.F.Bentley&D.B.Truman—

注意)320 番台は 2011 年度範囲外ですが、私のプリントでは触れておきます。

(1)起源

①アメリカ社会の流動性(↔ 固定的階級)

②アメリカ社会の多元性(ex.大都市の数)

(マルクスの「階級理論」…20C 初頭のアメリカに適合せず)

(2)集団理論と集団の形成

<思考法> $G=f(Ir)$

G=Group 集団

Ir=Interest 集団を構成する個人の利益関心

321. 利益集団(interest group)

…自分の利益を追求/自分の理念を主張

※利益集団は前政治的で、必ずしも政治活動を伴わない

cf) 圧力集団(pressure group) : 政治過程に直接働きかける ex) lobbying

cf) 提唱団体(advocacy group) [編集注:10 年出題歴アリ]

→自らの利益関心と直接関与しないことにも、自身の理念に従い積極参加(新型)

ex) クジラ・イルカの保護運動、尾瀬の森林保全

(1)特徴

①経済的 V 社会的状況に関連し、特定の政策を求める集団(現在の「圧力集団」)

②その集団の活動や政策を観察することで interest は認知可能

③各々の争点によって利益集団は組み替えられる

(2)利益集団の interest

①注目:特定の争点に能動的に参加する人々→求める政策ごとに分けられる

→「異なる集団に同時に属する」というのは争点異なる場合のみ

②測定:(利益集団の利益の大きさ)

= (特定の政策を支持する人の総数) / (観察可能な能動的な人の総数)

③客観的利益アプローチ:外から見て客観的に確定されるのが interest

322.A.F.Bentley “A Process of Government”



$G=A=I$ [編集注:02 年出題歴アリ]

G=group 集団(特定の政策目標の実現のためのもの)

A=Activity 活動(で特定の政策目標・利益関心を実現する)

I=Interest 利益関心(を確保するために活動する)

<A.F.Bentley;米;1870-1957>

※G…特定の政策目標を実現するための集団

→同様の interest アリ(activity を通して実現)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

∴ 集団とは活動で、その活動とは集団の **interest** を実現するためのものといえる

(2) 注目すべき点

① 政治過程(**political process**)という学問分野を開拓

＝制度や行政ではなく、個々の利益集団の切磋琢磨による段階的進展

② 特定の利益(どのような具体的政策を求めるか)が重要

→ 具体的・観察可能な集団に当てはめる

→ 活動 **activity** に注目…観察可能か否かが問題

→ (マルクスの理論と違って)利益集団論は数量化できるように理論を設定

→ **activity** も数量化できる(**activity** の数量化は今でも行われている)

③ 評価

Bentley は政治に対する新しい見方を提供した(当時は評価されず)

323. *David.B.Truman*



- ・Bentley の理論を再検討・再発掘
- ・行動論革命の中心的人物
- ・Bentley の考えと異なる部分アリ
- ・著書: "the Governmental Process"

< David.B.Truman; 米;1913->

(1) **interest group** の定義

1. ある状況に関連し、求められる目標について要求、主張

→ 世間の様々な苦境及びその状況の改善を図る

2. 他の集団に対する要求や主張によって観察可能になる

Ex. 労働者: 低賃金に困る → 労働者: 賃金上昇要求

→ その労働者の **interest group** が観察可能

3. 共通の 態度(attitude) アリ

→ ある程度継続的(**behaviour**に近い)

※これらの条件をみたす集団が **interest group** である

☆ Bentley と Truman の **interest group** に対する考え方における違い

Bentley: **G**があれば**A**し、**A**は**I**に基づく

(Trumanより広い抽象的な定義)

Truman: 目標があるから他集団に対して主張しなければならない

(Bentleyより狭い具体的定義=政治過程に密着する定義)

∴ Trumanの方は現代で言う「圧力団体、圧力集団」と呼ばれるもの

(2)政治過程

注意) 利益集団の定義が狭いため political process の考え方が Bentley と異なる

<定式> $S \rightarrow D \rightarrow P$ [編集注:03, 05 年出題歴アリ]

※S…安定(stability)

D…混乱(disruption)

P…抗議(protest)

cf)制度化(ref.211-(2))

・制度は以下のように登山に例えられる(山の頂上に価値が存在するとする)

昔;試行錯誤しながら登山(いくら資源を用いても価値が得られるとは限らない)

→社会の進歩;その山に登山ルートが形成→先人たちの道を辿れば十分

→価値を手に入れるための定式化された行動が形成

1.S…安定:制度化された集団

→全ての集団は定型化された行動様式(制度)に準じている

→制度化された集団において、参加者間の interaction の繰り返し(∴安定)

2.D…混乱:状況の変化

→従来の制度の変遷が発生→安定した行動様式(制度)が動揺

3.P…抗議:変化に対応した新しい集団として政府に対して抗議

→観察可能な interest がないので、政治的利益集団(圧力集団)へと変質

※Dがある程度大きい段階で利益集団形成

→Pの段階で政治的利益集団(現在でいう圧力団体・圧力集団)形成

(問題点)観察可能な interest がないところで政治への抗議が起こる

→「客観的利益アプローチ」が原因ではないかと思ふ

→以後、この問題を考える

324. Truman 以後の集団理論

(1)D→P への移行

※「D がある程度大きいと P になる」といったときの「ある程度」が問題点

→どの程度大きいと D から P になるのか→費用=効能論(cost=benefit theory)

ex)菅首相「消費税を 5%から 10%に上げます」=D→反対者は P へ

※抗議にあたってどのような cost を払うのか

(a)組織費用(organizational cost)

→政治的利益集団に支払う費用

ex)デモに参加→交通費、機動隊と衝突、TV に写される

(b)抑圧費用(repression cost)

→制裁の可能性に対する費用(民主国家でも政治的抗議への制裁はある)

ex)財務省職員が増税反対デモ→職場ではぶられる…

∴(D による loss)>組織費用+制裁費用

⇒政治的利益団体に参加する(protest)

(D による loss)≤組織費用+制裁費用

⇒政治的利益団体に参加しない…沈黙(aquiscence)となる

∴S→D→P に対する修正

$$S \rightarrow D \nrightarrow P$$

→Aquiscence となる場合アリ

(2)新しい政治過程の発見

S→P→Tr[編集注:「安定→抗議→社会変革」の形で 00 年出題歴アリ]

※S…安定(stability)

D…混乱(disruption)

Tr…社会変革(transformation)

<実例>Montgomery のバスボイコット事件

公民権運動の指導者
Martin Luther King



バスボイコット事件の火付け役
Rosa Parks

<展開>1955 年アラバマ州都 Montgomery

公民権運動以前のアメリカ南部…公然と人種差別

→公共の場(ex.交通機関・映画館など)で白人と黒人を隔離

→市営バスにも白人用座席と黒人用座席

→Rosa Parks:仕事で疲れていたのも、偶然空いていた白人用座席に座る

→運転手はどうかそうとするが、Rosa は拒否

→警察に通報→Rosa 逮捕

→これだけのことで逮捕されたことに黒人の怒り爆発

→バスボイコット運動(指導者:Martin Luther King)

※奴隷時代以来、黒人差別は存在したが、当然のものとされてきた

(黒人は白人の席に座ったのを咎められればどいていた)

→軽微な諍いはあれ、混乱は生じていなかった

∴混乱が存在しない状態で抗議が発生することが示された

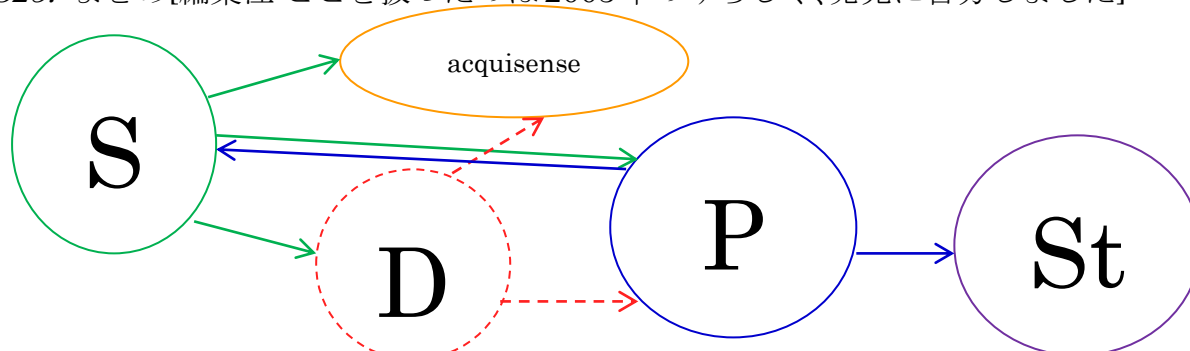
→安定が、矛盾を抱えたものであるとこのような事態に至る

→安定に潜む矛盾を解消するための社会変革を目的に抗議発生

(3)主観的利益アプローチ

- ・以上の例では D がない中 P に至る(以前に目立った行動ナシ)
- 人々の間に社会変革を望む **interest** があったか否か
- Truman 式に考えると、**interest** は計測可能
- ∴前述の例では **interest** が計測不能なので、**interest** がなかったことになる
- これでは実際に生じた政治過程を説明できず(客観的利益アプローチの問題)
- interest** には、**主観的で表面化しないものもある**(心中に抱く想い)
- 主観的利益アプローチ**の概念

325. まとめ[編集注:ここを扱ったのは2003年のみらしく、発見に苦労しました]



326. 集団理論の特徴と批判

- S→D→P にせよ、S→P→Tr にせよ、前提として S(安定)が存在
- ∴1960 年代前半:アメリカ合衆国…ヴェトナム戦争前の安定状態
- 政治過程の到達点は社会の安定状態

(1)社会の安定状態の前提

- 現実には不安定な社会も存在 or 一見安定だが、不満・矛盾の燻る社会アリ
- 安定を前提とする理論は現実には適合せず、不適である

(2)合理的人間の前提

- 合理的人間:cost を冷静・理性的に考える人物
- 人が抗議運動に出るとき、合理的思考に基づき cost を計算しているか
- 実際、非合理的なもの(ex.熱狂)が人々の行動を動かす例アリ

(3)利益集団の形成

- ・「争点により自由に組み変わる集団」←アメリカ社会の流動性を反映
- アメリカの組織とヨーロッパの組織ではアメリカの方が制限緩
- 集団理論はアメリカ社会にのみ適合するのではない(他に通用するのか)
- ＜∴アメリカ以外では固定的な組織の中で人々が暮らしているのではないか＞
- =**団体主義(コーポラティズム)(corporatism)** [編集注;03 年出題歴アリ]
- (元々の意は「人が団体として行動すること」)
- cf)Althusius の社会契約説

cf)現代の団体主義…neo-corporatism

→南米で強(元々南米についての概念)、他国に拡大

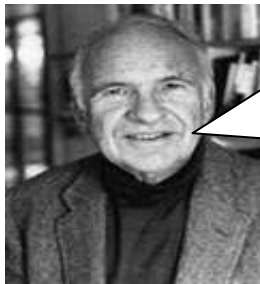
cf)南米の強力な団体…軍隊・カトリック教会・労働組合

→アメリカ以外(特にヨーロッパ)でこの傾向強

∴集団理論はアメリカ合衆国における理論である

—次項から試験範囲に復帰します—

330. *political leadership* の理論—J.M.Burns "*Leadership*"(1978)—



※現代…某国の K 首相の leadership の欠如、ドラマにおける"leadership"

→"leadership"の具体例に溢れている

→しかし(否それ故に)leadership の理論については乏しい

☆**political leadership** ≠ **leadership** であることに注意

※世間の多くの本…leadership(会社、居酒屋 etc.)を扱う

☆ここでは、**political leadership** を扱う(民族・国を救う様な、重みの大きいもの)

(1)起源

(a)古代ギリシャ時代

→Plato:哲人王(**philosopher-king**)が政治的支配者になるべき

∴叡智=物事を見通す高度な理性を有する

(b)ルネサンス期

→Machiavelli:君主(**principe**)に必要なものとして以下の 3 点を挙げる

=当時の北イタリアの君主制小国における君主

- ・実力(power) :≡軍事力として捉えてよい
- ・技術 :説得力、交渉力、外交力 etc.
- ・野心(fortuna) :英語の"fortune"

→自分のところに來た幸運を掴み取る意気

=政治的支配者として君臨しようとする意志

※野心ナシ⇒巡ってきた幸運を逃す

野心アリ⇒時流の流れを見極め、巡ってきた幸運利用可

(c)19C 末

→M.Weber—支配の三類型—

- (i)合法的支配 (legitimate authority)…法に則る支配
- (ii)伝統的支配 (traditional authority)…血縁・伝統に則る支配
- (iii)カリスマ的支配 (charismatic authority)…カリスマ性に則る支配

※charisma…元々は中近東の宗教指導者

→常人離れした人格・資質・呪術技量・英雄性などの能力

→これに依存する心理的要因

ex)合法的支配—菅首相…法律に基づいて選出(議会の承認等)

伝統的支配—絶対君主(王権神授説、神聖性 etc.に基づく)

カリスマ的支配—ナポレオン/ヒトラーなど(個人の資質に基づく)

※”authority”とあるように、厳密には「権威の根拠」の三類型である

→権威が伝統・法・カリスマのどれに基づくか

(d)20C 前半

注意)この節では p21～23 の知識を少し使います。再掲載するのは紙面の無駄なので、該当ページは各自確認しておいて下さい。

Burns:権力学派(power school)との決別

cf)権力学派…power 重視

∴power の重視に伴う問題点を憂慮

ex)H.D.Lasswell

(復習)政治家…「他のあらゆる価値よりも権力という価値を重視する」

(問題点)①power 重視の下、leader とは何か→「偉い人」(権力者)

→②では、power とは何か→会長、CEO など実際の権力(実体論と化す)

※”leadership”より”power”が着目され、権力者のみ考慮されているという問題
(leader=権力者の構図が成り立つという問題)

(e)leadership 論への 3 つの衝撃

(i)現実社会からの個性の強い leader の消滅

WWⅡ 前…良い意味でも悪い意味でも強力な指導者アリ

ex)ナチス・ドイツ—ヒトラー、イギリス—チャーチル

WWⅡ 後…1960 年代:米;ケネディ、ソ;フルシチョフ、仏;ド・ゴール

1980 年代:米;レーガン、ソ;ゴルバチョフ、英;サッチャー

現在 ∴目立つ/威厳ある leader が現れない状態

∴情報社会…Internet 等で情報漏れ→威厳ナシ

(ii)政治学への大衆主義浸透

→特定の個人に目を向けるのではなく、一般大衆に着目

→特定の者が有する power より広く分布する influence 重視

→leader への注目縮小

(iii)心理学、社会学、marketing において leadership 多用

→居酒屋の売上向上など、日常的・小規模な leadership 氾濫

→political leadership は考察されず

☆leadership 論の凋落

→Burns: political leadership 論の再構築を図る

(2)political leadership と集団の形

1. leader が follower に influence 行使

2. leader と follower は同一目標をもつ(leader が follower の目標を引き出す)

→leaderはfollowerの利益関心 (interest)に働きかける

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

<定式> $G=f(Ir,Pr)$

G = 集団(group) <leader と follower から構成>

Pr = 目標 (purpose)

※leader…purposeの設定が最重要課題

331. 権力と leadership の区別

(1) 相互作用としての leadership

Burns: power …一方的関係

leadership…相互的關係 とする

1. 目標の重視

→leader の目標と follower の目標は一致する必要

cf) power の行使…その人の目標を相手に対し一方的に押しつけている

2. 相互作用

<fig;331-1;相互作用による止揚>

→leader と follower は常に相互作用(対話)を行う

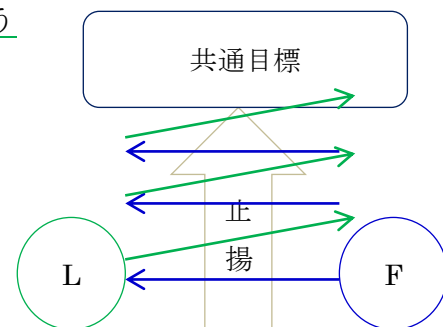
→leader と follower の対話からの止揚

→共通の目標確立・それに向かう

※leader の役割…一人々の求めるものを与える

→follower との対話と、対話を通した

共通目標への進行が重要な役割



(2) それぞれの定義

1. 権力の定義

→潜在的(顕在的でなくてもよい)power holder(権力保持者)は、

(a)自分の目標を達成しようという動機(motive)により

(b)資源を動員して

(c)power respondent に影響力を与える

2. leadership の定義

→特定の動機(motive)や目標(purpose)を持つ者は、

(a)他の潜在的な leader 候補者と競争・闘争しながら

(b)資源を動員して

(c)follower の動機を引き出して結びつけ、満足させる

☆leader: follower 自身の中で明瞭化していないが、漠然と不安に思い意識することやそれに伴う motive を引き出し、具体化させ、要求へと変化させる。また、不安・意識の内容を interaction を通じて共有することで、人々に安心と満足を与える。

332. leadership の 2 類型

(1) 相互取引型(transactional)leadership

- (a) 定義: (i) leader は follower と価値の交換(exchange)を行う
(ii) leader と follower の目標が一致するのは一時的(その場限り)
(b) 種類: 世論(opinion)、集団(group)、政党(party)、
立法(legislative)、行政(executive)などを率いるもの

(2) 相互変容型(transforming)leadership [編集注: 07 年出題歴アリ]

- (a) 定義: (i) leader は follower の潜在的要求(need/demand)の認識だけでなく
(ii) follower の潜在的動機も引き出し
(iii) 両者の関係を互いに励まし合い、高め合う継続的關係とする
(b) 種類: 知的(intellectual) …ex) Newton…paradigm shift
改革(reform) …ex) Kennedy…既存体制の改革
革命的(revolutionary) …ex) Lenin …体制を壊す革命

※ Burns の議論において重要なのは、transforming の方である

(3) 類型の意味(解説)

1. 現代政治学においての意義

→ 曖昧になっていた権力と leadership を明確に分離(権力重視への徹底的批判)

2. リーダーシップ研究における意義

・ **偉人説**… leader は特別な資質を持つ(∴いかなる時代・場所でも leader である)

ex) 源義経 → 特殊な資質がある → フビライになったとする風説

・ **状況説**… 状況が leader を要し、leader を生む(∴ leader は状況に左右される)

ex) フランス革命後の混乱・干渉戦争 → 英雄の必要 → ナポレオン登場

※ どちらも 100% 真という訳でもなければ、100% 偽という訳でもない

→ 両者を折衷し、合わせていく必要

☆ Burns の transforming leadership

→ 偉人説と状況説を結合

→ { follower の潜在的意図・不満の存在 = 状況説の要素
leader がこれを見抜き、導く資質 = 偉人説の要素

3. 類型そのものの問題

(a) Burns の議論には基準が 2 種(関係と目標)

- ・ leader と follower の関係 — 価値交換 or 潜在的要求・動機の引き出し —
・ leader と follower の目標 — 一時的 or 継続的 —

関係 目標	価値交換	要求・動機の引き出し
一時的	transactional	*1
継続的	*2	transforming

※Burns の leadership 論…空欄*1、*2 にあたる類型は説明されず

→*1 は非現実的ゆえ、考察する必要ナシ(対話を重ねる \longleftrightarrow 一時的)

→*2 については考察の余地アリ

ex)田中角栄—新潟県民(transforming とは言いがたいが、長期的関係)

※*2 の類型…アメリカ・イギリスでは見られない

but 日本・イタリアなどでは継続的価値交換はあり得る

→これを leadership の類型に含むかの考察は必要

333. 特徴と批判

(1)特徴 1

→単なる power、influence と leadership を区別する

→相互変容型 leadership の重視(対話による相互の向上の重視)

(2)特徴 2 と批判

→Burns:偉人説への偉人説への偏重を打破

→leader と follower の interaction に着目し、それを強調する

→単なる power wielder と異なる leadership のあり方を示す。

(democracy の中に遍在する leadership から本質を区別し、その特性を強調)

but要求水準が高すぎるため、最近では真のleaderと言える指導者があまり出ない

(3)批判—類型と概念の不備—

<類型>332-3にあるような、類型の欠落

<概念>leader と follower はいかにして「相互に高め合う」のか

☆populism—悪しき大衆主義—へのアンチテーゼ

2011 年度の講義でなぜ leadership の理論を扱ったか

→①RDSK 氏がリクエストしたから

②今の日本だからこそ扱う必要がある

∴菅首相…leadership の欠如、居座り

→大衆には強力な leader を望む風潮

=早く決定し、強く人々を率いていくような人物

→小泉元首相のような人物が望まれる

→このような人物の下での決断は熟慮・討議に富むものか

(ex.郵政民営化)

→democracy というよりむしろ populism というべきもの

→これは危険である(ex.ヒトラー)

→相互変容型リーダーシップのあり方を求めるべき(ex.ガンディー)

☆反動で強いことを言う人物に惹かれるのは危険

→Burns の leadership 論に立ち返り、熟考することが大切

先生はこの辺を極めて熱く語っていました。ほぼ第2問の前パ
ラシに近いような…

400. 政治社会の理論

401. 政治社会の考え方の歴史(適宜 302 番を参照せよ)

※政治社会…政治的側面から見た我々の社会

(1)ギリシャ・ローマ時代

- ・Polis の存在(ギリシャ)
- ・Res Publica(ローマ、古代の共和国、republic の語源)
→両方政治機構に関する話題(どのような組織を作るか)

(2)中世

※大きく分けて 2 通り

①Civitas dei(神の国)…キリスト教共同体の宗教哲学

- 中心に絶対者である神が存在
人間は神への敬愛(アガペー)で神と結合

②封建制…社会有機体説

- 支配者・被支配者間のつながり不可欠
各々がその役割を果たすことで社会成立
(一つの役割が欠けると社会が不成立)

(3)近代

※また大きく分けて 2 通り

①Jean Bodin—絶対主義のイデオロギー—

→国家主権論提唱

→封建遺制における諸権利を超越する、最高の絶対的権力の存在を規定

→封建遺制における権利を否定

II

国家主権(絶対的権力)

→これを国王に付与し、絶対主義国家成立(ex. フランス)

②近代政治イデオロギー(ex. Hobbes、Locke、Rousseau)—liberalism の要素—

国家 VS 個人…強大になった国家から個人の権利を守ろうとする動き

T.Hobbes J.Locke J.J.Rousseau らの社会契約論(契約当事者=個人)

→対等な個人が集結し、国家形成

自由・平等・合理的

→国家と、その構成員たる個人を保護

※but 彼らがこの議論を出したとき、これは fiction とされる

(∵全ての人間が合理的であるとは限らない)

→fiction であることは認め、それを前提に制度の改善を図る

※以上の考え方には共通点アリ

→「良い個人」+「良い制度」=「良い政治」 とする

(あたかも、「良い材料」+「良い調理法」=「良い料理」 となるかの如し)

☆N 君の歴史 1 シケプリからポリスに関する
記述を拝借(紙面・科目の都合で一部変更)

ポリスは武器自弁と市民皆兵原則をもつ農耕
市民の戦士共同体で、アクロポリスやアゴラ
からなる中心市(asty)と周囲の田園部からな
る。重装歩兵として国家防衛の戦士となった
市民は国政への発言力を強める。

*ポリスの顕著な特徴は、**共同体国家**である
こと。構成員間に経済的・社会的階層分化はあ
るが、人格的な支配従属関係は原則として存
在しなかった。(中略)ポリスの構成員の中で
資格を備えた者が交替で行政を担当し、有事
の際には国土防衛の戦士となった。

but 近現代では材料=人間の質を確認するとなると、人権問題

ex)19C 英国;保守党

→選挙権拡大に反対する者

…「人間の形をしたモノに選挙権を与えたら大変なことになる」

→差別的表現として糾弾される

→従って、材料は選別できない(市民は自由∧平等∧合理的と仮定する)から、
調理法=組み立て方=機構が重要

→機構…間接民主制 or 直接民主制、小選挙区制 or 比例代表制 etc.を考える

→機構を改善することで良い政治の実現を図る

402. マルクス主義による政治社会の理論

(1)階級社会(class society)

→古代以来、あらゆる社会は利害の対立する各階級から構成される

ex)古代:奴隷所有者—奴隷、中世:領主—農奴

近代:君主—臣民、現代:資本家—労働者

(2)階級闘争(class conflict) [編集注:02、05 年出題歴アリ]

→特権を独占する支配階級から、被支配階級が特権を奪還し、自らのものに帰そうとすることで生じる闘争

cf)Marx…「人類の歴史は階級闘争の歴史である」

ex)古代:奴隷反乱、中世:農奴反乱、近代:市民革命、現代:労働者革命

(3)国家=暴力操置(装置)

→class conflict の発生

→国家:支配階級の特権保護を目的に、被支配階級を抑圧

→軍隊・警察を用い、暴力によって階級闘争を抑圧する

(4)階級闘争論における政治社会

<定式> $Sc=f(P,Cf)$ Sc…society(階級社会)

P…power(権力)

Cf…conflict(階級闘争)

※Marx…我々の社会は、不断の権力闘争・階級闘争により成立する

p54~59 の 410 番台は、試験範囲外
だから注意してねっ。

(by RDSK)



410. 政治システム論—D.Easton—

注意)410 番台は 2011 年度範囲外ですが、私のプリントでは触れておきます。

(1)源泉

・起源…システム論

=1940 年代に成立の当時の情報理論

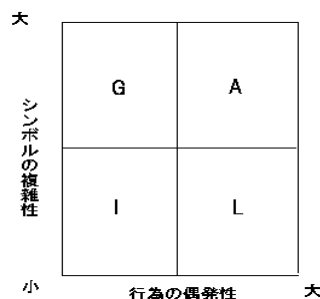
(コンピュータの元祖、人工知能研究、OR(operational research)等)

→T.Parsons が社会学にこれを利用

→社会システム論(→AGIL 図式が用いられる)

→D.Easton はこれを政治学に転用→政治システム論

<fig;410-1;T.Parsons と AGIL 図式と D.Easton>



column 例のごとく脱線

T.Parsons は社会学者として功績を挙げました。ここでは、社会 1 の過去シケプリから、彼の gemeinschaft と gesellschaft の議論を表にしたものを取り上げてみます。

Gemeinschaft	Gesellschaft
community	association
感情性（感情に左右される）	感情中立性（感情に左右されない）
集合体指向（集団の利益を重視）	自己指向（自分の利益優先）
個別主義（えこひいきなど）	普遍主義（誰に対しても平等）
属性主義（行動パターンが自分の属性で左右される Ex.身分制度、白人黒人）	業績本位（能力主義）
無限定性（トータルな人間関係）	限定性（関係が場所、時間などで限定されている）

(2)政治社会の定義

<定式> $Sc=f(B1,B2)$

※Sc…society

Bn…behavior

☆政治社会は行動の相互作用により成り立つ

※system は原則何を指し示してもよい

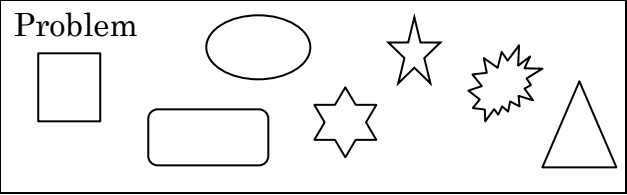
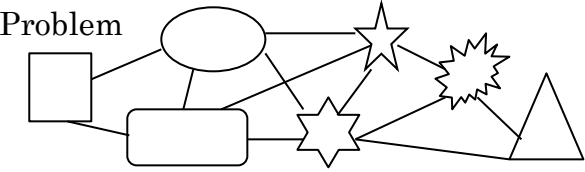
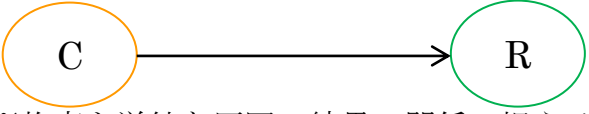
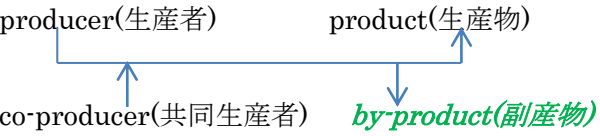
Parsons において要素は一つ一つの行動(behavior)で、その相互作用が system

411. システム的思考法

(1) 科学一般に応用できる「方法論」

→ **system**…主体が客体を様々な形で認識するための形式

(2) 考え方の特徴

(a)機械時代の考え方(古い時代)	(b)システム時代の考え方(新たな時代)
<p>①還元主義</p> <p>→ある問題は、それを構成する原子(atom)から成る</p> <p>※モノ(単体)自体に注目</p> <p><fig;411-1;還元主義></p>  <p>↑この Problem は 7 つの構成原子から成る</p> <p>cf)このような考察方法において…</p> <p>社会学一個々の人間が構成要素</p> <p>→心理学に還元可能</p> <p>→同様に心理学→行動科学→生物学</p> <p>→化学→物理学→素粒子論 と還元可能</p> <p>→学問の王者は素粒子論となる</p>	<p>①拡張主義</p> <p>→ある問題は、それを含む全体の一部で、他の部分と一定の関係を持つ</p> <p>※モノ同士の繋がりに注目</p> <p><fig;411-2;拡張主義></p>  <p>↑構成原子間の結合が重要</p> <p>cf)このような考察方法において…</p> <p>記号・象徴→言語→通信→情報</p> <p>※現実世界…複雑→考察難</p> <p>→客体を認識する際に一部を切り取る必要</p> <p>→その一部分=system、system と外部の繋がりは環境(environment)</p>
<p>②分析的思考</p> <p>→物事を分割して考察</p>	<p>②構成的思考</p> <p>→問題をより大きな問題の一部と見て考察</p>
<p>③機械論=還元的因果論</p> <p><fig;411-3;因果関係></p>  <p>※物事を単純な原因—結果の関係で捉える (物事を還元し、因果論とする)</p> <p>→物事を突き詰めると単純な因果関係になる</p> <p>※実験…これを極めるための手法</p> <p>→理系は全てこの考え方</p> <p>[特徴]</p> <p>①一定条件下で因果関係追求</p> <p>②全ては「法則」に従って動く</p> <p>③「目的」は主体が付与する</p>	<p>③目的論</p> <p><fig;411-4;産出関係></p>  <p>※副産物は 00 年出題歴アリ</p> <p>※物事を複雑な産出関係として把握</p> <p>※co-producer と by-product は多様に存在</p> <p>ex)producer :窓を開ける</p> <p>co-producer:換気扇をつける等</p> <p>product :風が入る</p> <p>by-product :騒音が入る、蚊が来る等</p> <p>※副産物:生産物を得る過程で生じるもの</p>

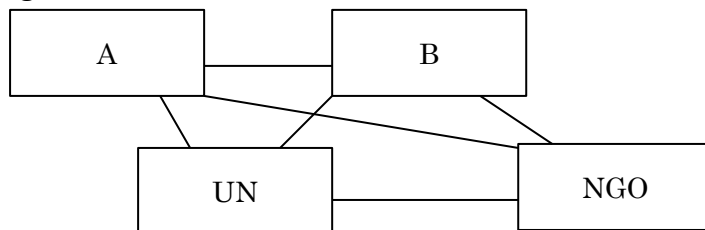
412. システムの定義

※大量に存在するが、ここでは政治理論に用いられるもの 2 つを扱う

(1) Definition 1 (ベルタランフィーの定義)

→相互作用する諸要素(interacting elements)からなる複合体
(国際政治論で主に活用)

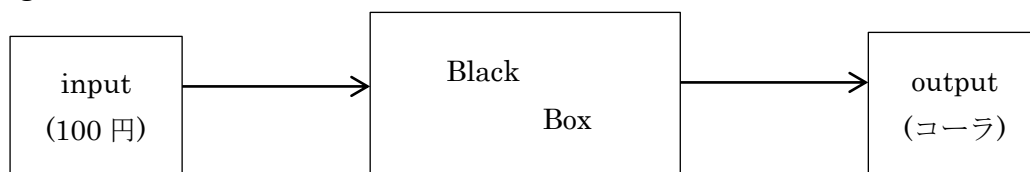
<fig;412-1;相互作用する複合体—国際社会—>



(2) Definition 2 (D. Easton の定義)

→一つ or 複数の入力(input)を受容し、一つ or 複数の出力(output)を生じる装置
(国内政治で主に活用)

<fig;412-2;入出力のある装置—ex.自動販売機—>



※後者が Easton の用いる定義

我々の意見、投票、要求が input であり、output は政策として出現

413. D. Easton の政治システム論

(1) システム分析の基本的前提

(a) 政治=行動(behavior)のシステム

(b) 環境(environment)

→system を認識する際、システムはその周囲の環境と区別可能

→system は環境から影響を受け、かつ環境に影響を与える

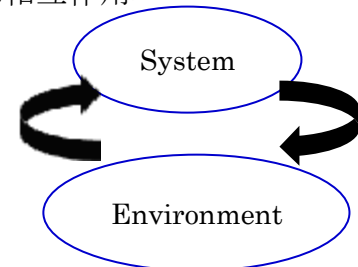
=system と environment は相互作用の関係にある

(c) 反応(response)

→system に対し入力が生じると、system はそれに対し必ず反応

(output=response)

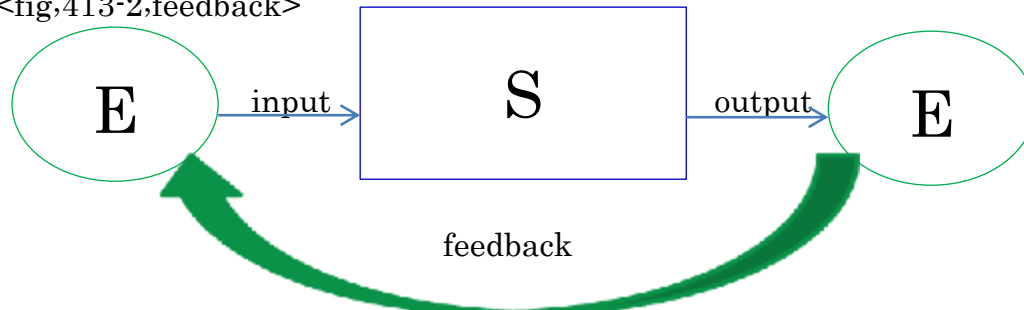
<fig;413-1;相互作用>



(d) **feedback** [編集注;01 年出題歴アリ]

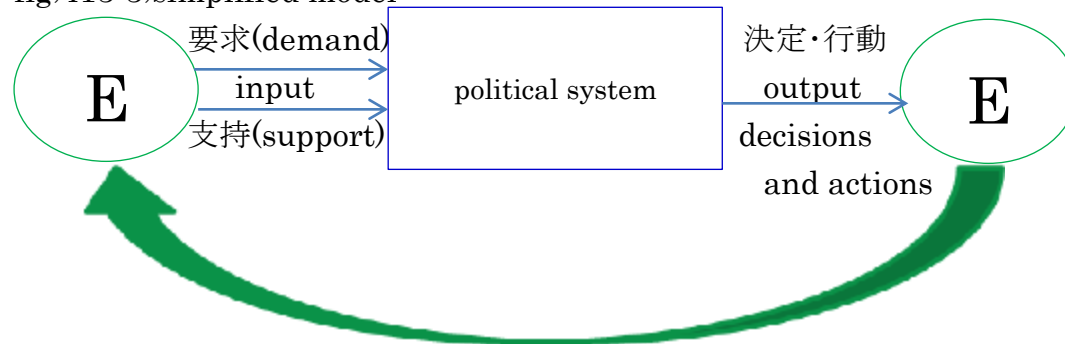
→ system が環境に影響した後、影響を受けた環境は system に新影響を及ぼす

<fig;413-2;feedback>



(2) 単純化モデル(simplified model)(cf.イーストン『政治分析の基礎』 p130)

<fig;413-3;simplified model>



※feedback: decisions and actions の影響がどうなったかという情報で入る

ex) 公共事業中止 → { 財政赤字減少
 地方が死に体 というのが情報として feedback される

cf) 「政治とは資源の権威的配分である」(by D.Easton)

(3) 重圧と持続

前提—characteristics of a system

…system は、system 外部からの障害に対し、自身をある程度防衛できる

ex) 我々の体—システム(responsive system)である

傷ついてウイルスが侵入したとき、防御作用アリ

ウイルス ← 白血球/傷・血 ← 血小板

※傷があまりにも深いと死ぬ=システムも守り切れなかったということ。

(a) **重圧(stress)** [編集注;05 年出題歴アリ]

→ system 外部から来て、system に対し障害になるもの

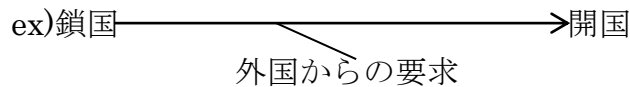
(i) 戦争・革命

→ political system に対する大きな障害

∴ 戦争に敗北 or 革命が成功 ⇒ system 消滅の可能性

戦争に勝利 or 革命が失敗 ⇒ system に対する大きな stress

(ii) 環境の変化



(iii) 要求

→ 特定条件下において stress となる

1) 能力・意思の欠如

→ system が要求を実現するための能力・意思に欠く

ex) 首相が不人気で政策実行力に欠けるが、景気回復が求められる場合
→ 首相交代の発生

= system の変化

2) 入力の過負荷(overload)

→ 処理不能な要求がなされる

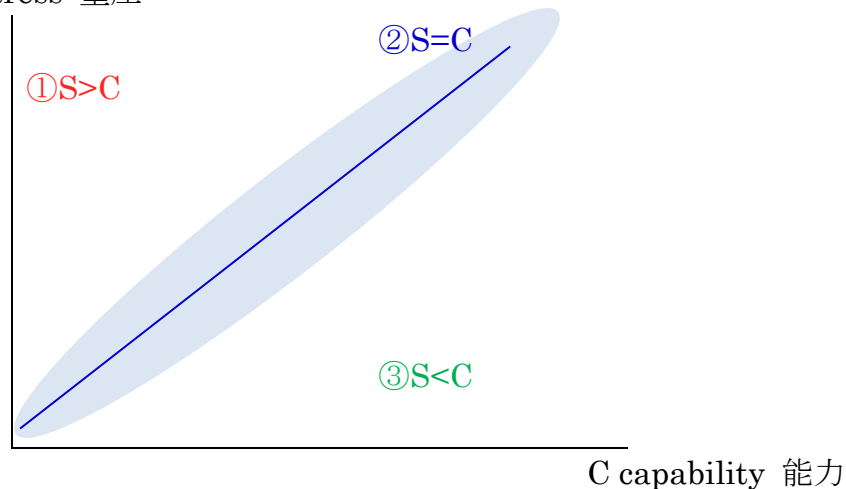
※ overload... overload とする基準は特定の人が判断

→ 注意して用いる必要

(b) 消滅・安定・持続

<fig;413-4:消滅・安定・持続>

S stress 重圧



※① $S > C$ のとき—消滅(disappearance)→システム消滅、新システム発生

② $S = C$ のとき—持続(persistence)→多くの場合はこれにあたる
(概ね<fig;413-6>の楕円部にあたる)

③ $S < C$ のとき—安定(stability)

∴大抵の system... 新たな stress に対し対抗(内部改革)

→ capability を向上し、その stress を処理

→ また新たに stress 発生... D.C.

※以上のような循環を持続(persistence)という

※高橋先生曰く、システムの内部対応・循環が一番面白い点

ex)イギリスの王政…システム継続

※参政権拡大、国王の権限の形式化などにより **capability** 拡大

but この後 **disappearance** の可能性(王室廃止の可能性)もある

414. 特徴と批判

(1)均衡理論(balancing theory)の一つ

∴**機能主義(functionalism)**の一つである

※functionalism…均衡理論の特質アリ

機能不全(dysfunction)―例外に過ぎず

※ $S=C$ のときはSが内部改革するので分かるが、 $S>C$ の場合 systemは崩壊し(分析する時間なし)、 $S<C$ の場合 Sを抑圧し Cを高く見せている可能性アリ

ex)中国;ネット規制(Sの抑圧)

→このため、システム論は結果論になりやすい

(安定しているという理由の下、現行システムを肯定しがち)

ex)日本…この理論の下では $S<C$ となる

→本当に $S<C$ であるかどうか

(2)システムの消滅

→システムの消滅を見る

but システム理論はシステム自体の消滅を上手く説明できない

($S>C$ という説明に留まり、Sの作用・大きさについて詳述不可能)

(3)誇大理論(grand theory)―C.W.Mills から Parsons への批判―

※これがシステム理論に対する最大の批判である

→システム理論…全てを説明する理論

but 時代・地域による背景・差異を無視

ex)鎌倉時代と現代の政治が同じ扱い

縄文時代の日本とインカ帝国と現代のアメリカ合衆国も同じ扱い

→一般性・抽象性があまりにも高く、現実を把握するのに不適

→実用性に欠けた議論という欠点

―次ページから試験範囲に復帰します―

420. 構造=機能論(structural-functionalism)

[編集注:2011 年はここから少なくとも 1 題出るそうです]

注意)「構造=機能」も「機能=構造」も正しいですが、ここでは前者に統一します。

注意 2)ここに出てくる「政治システム」などシステム論はは本来 410 番台で扱う
ので、そちらに目を通しておくとう理解が深まると思います。

※1960 年代初…途上国の政治を初めて捉えた本の出版

G.A.Almond & J.S.Coleman “The Politics of the Developing Country”

*従来、途上国の政治は、「まっとうな政治でない」として軽視・無視される
数年後…異なる本の執筆(比較政治学の成立)

G.A.Almond & G.B.Powell Jr. “Comparative Politics”

(1)源泉

(a)文化人類学(19C 後～;ヨーロッパ発;遠い源泉)

→未開社会の研究(どのように研究するか→研究法発達)

→多様な分野に対し影響を与える

cf)実体と機能

実体…要素それ自体

機能…要素間における関係

∴旧来:研究者の暮らす社会と未開社会の隔絶→研究価値ナシとされる

but 文化人類学:「大統領」や「ジャーナリスト」等の実体のみを観察す

る従来のあり方を否定し、未開社会における機能を見

ることの重要性主張

(ex.大統領不在だが、首長や祈祷師がその役割を担う

ジャーナリスト不在だが、祈祷師がその役割を担う)

column)ちょっと補足

この辺の記述はまず試験に出ませんが、講義を切った人にはわかりにくい
と思うので具体例で解説します。

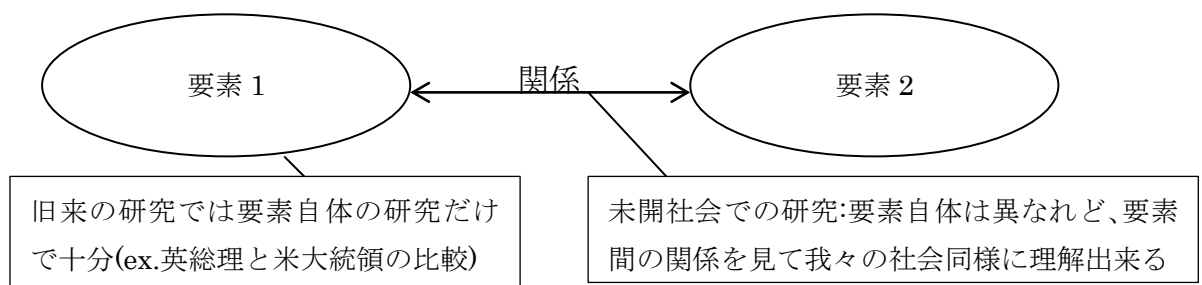
実体は要素それ自体を指し、機能は要素間の関係を指します。

例えば「フォーク」と「箸」を考えて見ましょう。これらはどう見ても別種
のものです。つまり、実体としては全く違うわけです。しかし、これらは「食器」と
いう用途で共通します。このように、機能としては比較可能なものになるのです。

☆機能に着目することで、未開社会も先進社会同様成立するといえる

(我々の社会も実体=要素自体は不安定に変化するが機能は安定している)

<fig;420-1;要素と関係>



(b)構造=機能論(structual-functionalism)(WWⅡ後:アメリカ合衆国)

・要素…それ自体は歴史的展開の中で変容

but 機能…政治社会の中で長期にわたり安定

ex)アメリカ大統領…現職大統領は変化するが「大統領」の機能は安定

→安定した機能の組み合わせ=構造

☆我々は変動する要素に目をとられがちだが、機能・構造への注意も必要

→これを政治理論に取り入れた人物が G.Almond

(2) structual-functionalism と political society

<定式> $Sc=f(Sr, Cl)$

※Sc:society

Sr:political structure

Cl:political culture

注意)今年の授業では、420-(1)-(b)で
T.Parsons と社会システム論をかなり軽く触れましたが、この後の流れに影響しないので省きます。
興味があれば 410 番台を見て下さい。

※我々の政治社会は、政治構造とその背後に控える政治文化から成り立つ

cf)政治構造はどこでもおおよそ等しく、政治文化が差異となる(後述)

421. 政治システム(by G.Almond)

※D.Eastonの定義…政治行動(political behavior)から成立する集合体

→我々の社会は行動から成り立つ

→特に、政治に関する行動を全部 pick up したものが政治システム

Almond は政治システムを「政治構造+政治文化」とする

ex)political system を建物に例えると

土台・柱・床材など基本部分—political structure

その他の部分 —political culture

(1)政治構造(political structure)

(a) Definition

→(political system を構成する)観察可能な政治的行動全般

=相互に関連する役割(role)の集合体(どの時代・地域においても基本的に不変)

cf)[社会学]role theory…我々の社会は actor からなる

→複数の role を持ち、それぞれの役をこなす

→interaction の下で発生

∴社会において人は他者と関係をもつ

※このような role を科学的に分析するには可視的である必要

(b) Explanation

→role…個人:各々の属する場面に応じ役割を持つ(複数の役割を演ずる)

→ここでは政治的行動にのみ着目する(∴人間活動…広範<経済的・社会的…>)

ex)政治家、官僚、政党支持者etc.

※(復習) 役割にはそれに対応する観察可能な役割行動がある
我々の社会…役割の複雑なnetwork(この中での位置が地位(status))
→actorはstatusに応じた行動を果たす(cf.301-②)

(2) **政治文化(political culture)** [編集注:00、10年出題歴アリ]

(a) Definition

→ 個々の役割に応じた行動の背後に存在する、心理的性質(地域毎に独特)

ex) 選挙運動において…

日本の選挙…候補者—「あともう一步」、劣勢を訴える(→英米なら逆効果)

英米の選挙…候補者—(候補者間の)「議論」、「有権者からの質疑応答」中心

→いずれも機能からすれば「支持の調達」目的

→but 方法(実態)が全く異なる

→∴各社会に**独特の文化的性質**アリ(これが **polytical system** の差異を生む)

(b) Explanation

→あくまでも「政治に関する文化」

→文化一般とは異なるということに注意

(c) Four kinds of political culture

① 政治態度(political attitude)

=心理学の”attitude”に等しい(心的方向性)

(日本で日常的に用いる「態度」と異なる)

→ ある主体の抱く興味関心

ex) ある事件のニュースに対する関心

同じ新聞をもらったとき、A:政治面から読む

B:スポーツ面から読む

∴attitude の違い

② 政治信念(political belief)

→ ある主体が信じていること

ex) 自由を重んずるか、平等を重んずるか

③ 政治価値(political value)

→ ある主体の抱く、善悪の価値観

※①、②を支える根拠

④ 政治技術(political skill)

→ 受け取り手に上手く受け取らせる技術

社会に上手く効果が現れるようにする方法

ex) 選挙戦術…日本—土下座、泣く

→候補者が泣いた場合:日本…人情に厚いと肯定的

:英米…感情が制御できていないと否定的

態度(attitude)

→一般に周囲のさまざまな事物・事象、あるいは個人や集団に対して、一定の行動を生じさせる働きをする心的傾向。

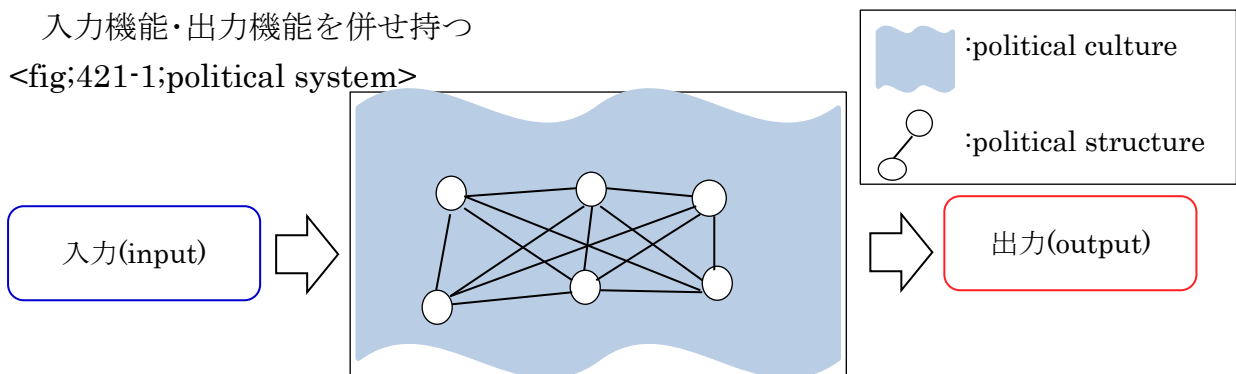
出典:『心理学(第3版)』鹿取他編
東京大学出版会

(3)政治システム(political system)

→役割の集合体である政治構造及びその背後にある政治文化から成立

入力機能・出力機能を併せ持つ

<fig;421-1;political system>



※political system(by D.Easton)

→一つ or 複数の入力(input)を受容し、一つ or 複数の出力(output)を生じる装置

ex)自動販売機…機械の中身はどのようなであっても問題なし(Black Box)

入れたお金(input)に対し、品物が出る(output)ことが重要

but G.Almond…system 内部まで立ち入った考察を行う

cf)Almond の political system を分かり易く例えると…
中身がスープと麺のみのラーメンのどんぶりを考える
このとき、スープ…political culture
麺 …political structure
全 体…political system
のように例えることが出来る

422.政治システムの機能

※構造=機能論ゆえ、機能への関心が大きい

(1)入力機能(input function) [編集注:06 年出題歴アリ(節中にも出題アリ)]

(a)political socialization & recruitment

(i)political socialization

→幼年期～青年期:人は常に社会化の訓練を受ける

=社会に適応するための訓練を受ける

(ex.学校の授業、親のしつけ etc.)

→ある社会の構造・文化を次世代に継承=socialization

→これにより社会が安定(構造・文化の安定的継承)

(ii)political recruitment

→socialization 後に発生

→特定の政治的方向に向け、新たな人材を政治組織などに登用

(b) **利益表現(利益表出)(interest articulation)** [編集注:01 年出題歴アリ]

→[言語]言葉を一音節毎に明瞭に発音すること

(i) Definition

→個人や集団が政治的意思決定を担う人々・団体に対して発する様々な要求
基本的には利益集団(interest group)が果たす役割

(ii) Method

①物理的 demonstration と暴力

ex)自爆テロ etc.

②private connection

ex)閥閥、学閥、地縁、血縁 etc.

③elite 代表

→議員・高級官僚等に自分の集団から人材を送り込む(ex.東大法学部)

④制度的・公的チャネル

→interest articulation に好適な、制度で定められ誰にも開かれた道

ex)マスメディアへの投稿、政党の支部、公聴会への参加

※②、③は access 出来る人限定アリ but④は万人に開かれている

注意)先生はここで、アドリブで圧力集団と利益集団・提唱集団に触れましたが、流れを切りたくないので省略します。知りたい方は 321 番を見て下さい。

(c) **利益集約(interest aggregation)**

※近年では一般用語として用いられる

(i) Definition

→政治に関する様々な意見・要求を具体的政策へとまとめ上げる機能
(官僚組織・政党が行う作業)

(ii) style=特徴的手法

①実利=取引 style

→多様な interest を、あたかも市場で売買するかのように扱う

ex)米軍基地建設:住民は反対していたが、国は補助金を出し懐柔

※「ダメなものでも取引次第では…」という考え方

②絶対価値思考 style

→世界観・ideology に基づく interest は取引では動かせない

ex)ゴミ処理場…粉塵での健康被害を危惧した住民は補助金も建設も拒否

※「ダメなものは絶対ダメ」という考え方

③伝統的 style

→過去の実例に基づく手法(ex.官僚組織)

※「昔からやってきたから…」という考え方

(2) **出力機能(output function)**

(a) **規則制定機能(the rule-making function)**

→議会(と官僚組織)が行う機能

(b)規則適用機能(the rule-application function)

→裁判所(と官僚組織)が行う機能

(c)規則判定機能(the rule-adjudication function)※(b)との区分が難しい部分アリ

→専門的に裁判所が行う(制定した法律・条例…を判定する)機能

(3)通信機能(communication function)

※communication function:(1)、(2)と別→(a)、(b)を異なる観点で考察し結合する
(a)、(b)を実現するための手段

423. 特徴と批判

(1)functionalism

(a)批判

→機能を前提とする(機能不全への配慮を欠く)

→均衡理論、現状肯定主義に陥りやすい

(b)特徴

→Almond・Easton が Black Box としての system 内部を構造と文化で説明

(2)政治文化(political culture)

→政治構造…時代・地域によらずほぼ等しい(ex.集合的決定、資源の集約的利用)

∴政治システムの差異は政治文化により生じる

(∴政治システム=政治構造+政治文化)

→理論として乱暴(∴全てを「政治文化」一心理的背景で片付ける

どこまでを「政治文化」とするかも曖昧)

→弁明として出されるのが「政治文化は残余類型(residual category)である」
=類型化し得ないものの余り

※高橋先生は「政治文化」という概念が嫌いである

∴政治システムの全ての差異を説明するのに政治文化が用いられる

but その政治文化自体が類型化できない(「残余」が説明の中核でよいのか)

→政治文化とは曖昧な概念で、政治の難しさを押しつけられた概念

→逃げるためには便利な概念(トランプで言う Joker)

※高橋先生は論文では Almond が言うところの「政治文化」を可能な限り回避する(ギリギリまで使わない)とのこと



p66~72 の 430 番台は、試験範囲外だから注意してねっ。
(by RDSK)

430. 民主主義の理論—R.A.Dahl *polyarchy*—

注意)430 番台は 2011 年度範囲外ですが、問答無用で触れておきます。

cf)R.A.Dahl “Polyarchy”(1971)

431. 源泉

(1)2 つの源泉

→democracy+pluralism

pluralism…多元主義 英米型民主主義で採用

cf)democracy —現代⇒プラスの意味(人民が主体的に権力行使)

demos(人民)+cratia(権力)



ギリシア時代⇒マイナスの意味(衆愚政治)

(2)J.Rocke—議会主権論—

・主権…他の全ての権利を超越する最高の権限

→Rocke…国王主権から議会主権へ

<理由>(a)議会=立法府

→立法府が立法権を行使し、全体の政治社会に代わり法律を作成

→立法権が種々の権力の中で最高の権力をもつ

cf)立憲主義(constitutionalism)

→国家権力は法律により規定され、法律に基づき行使される

(b)∴立法府の至高権(supreme power)

=主権(当時主権は国王がもつとされたため、「主権」の語を回避)

(3)J.J.Roussau—人民主権論—

ロックの説を「ドーヴァー海峡の向こうでは、人民は投票日一日のみ主権者となる。しかし、投票がおわると主権は議会のものとなり、人民には残らない」と批判(主権はあくまでも人民にあると主張)

(a)一般意思(意志)(*volonté générale*)

・最高意思→言い換えれば擬制人格∧共同自我である

※擬制人格:人民があたかも一人の人間のようになって発する意思

共同自我:一人ひとりのlevelを超え、人民が共同して一人の人間のような自我を持ち発揮する意志

※ある意思が一般意思であるための必要条件

①意思の一般性…全員が意思の決定に参加すること

②意思対象の一般性…意思の目的が公共の利益を実現するものであること

(b)主権の定義

主権とは一般意思の働きであり、人民に属す

432. 民主主義理論による政治社会のイメージ

<定式> $Sc=Max(G, Ir)$ Sc …society(社会)
Max…Maximum(最大)
G …group(人民・大衆を構成要素とする集団)
Ir …interest

※人民の利益を最大化するものが、理想の民主主義社会である、という意

433. なぜ *polyarchy* か

※polyarchy 論…アメリカ合衆国の現代政治学における代表 democracy 論

→なぜ democracy でなく polyarchy を考えるのか

(1) ”democracy” の二義性

(a) 価値的側面

→democracy…理想的政治社会・善き政治社会を指す
=政治体系としての democracy(概念的)

(b) 具体的側面

→democracy…「デモクラシー国家」、「デモクラシー体制」etc.
=実在する制度としての democracy(実体的)

※Dahl…(a)を”democracy”、(b)を *polyarchy* とし、”democracy”の二義性を排除



(資料)

理想の体系としての民主主義と、理想への不完全近似として案出されてきている制度的装置を区別しておくことは大切である。そして同じ用語が両方の意味に用いられる場合、不必要な混乱や、本質とは無関係な意味論的議論が、分析の妨げとなることは、経験の示すとおりである。

ダール『ポリアーキー』(三一書房)21 ページ

(2) *polyarchy*

・polyarchy=poly+archy (多頭政)
多数 権力

cf) 対義語…monarchy(君主制)

<fig;433-1;参加規模で分類した政体>

(参加数)少—————>多

monarchy
君主政

oligarchy
寡頭制

polyarchy
ポリアーキー

434. 民主化の2次元

(1)2次元—democracy 発展に重要な2要素—

(a)公的異議申し立て(public contestation)の可否

=政府の行為に影響を与えたり、批判したり出来るか否か

=自由化の尺度

(b)政治参加の権利

=公的異議申し立てができるような体系に組み込まれている人の割合

=包括度の尺度

(2)政治対戦の四類型

0…閉鎖的抑圧体制

ex)ミャンマー

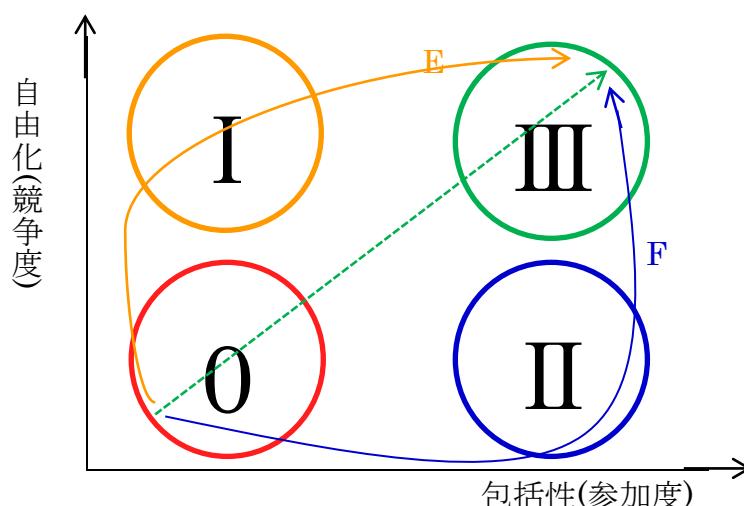
I…競争的寡頭体制

ex)カエサル以前のローマ

II…包括的抑圧体制

ex)ロシア

III…polyarchy



※EはEngland、FはFranceの発展経路 <fig;434-1;政治体系の四類型>

(3)閉鎖的抑圧体制からの民主化の3つの理論

①経路1: 閉鎖的抑圧体制→自由化→参加 (0→I→III、England型)

②経路2: 閉鎖的抑圧体制→参加→自由化 (0→II→III、France型)

③経路3: 閉鎖的抑圧体制→自由化・参加同時進行(点線部)

※注意)講義及び原書では「経路I…」のようになっていたが、政体で用いた「I、II…」との混同を避けるため、「経路1…」のようにアラビア数字を用いた

435. 特徴付ける変数

(1)議論の限定

(a)命題の再建

→現代…democracyの発展・浸透、いかなる独裁体制でも形式的には包括的

ex)朝鮮民主主義人民共和国

→高度に包括的な体制を前提とする(経路1のような発展を考えない)

→この下で、公的異議申し立てを増大させる要因を考える

=polyarchyを実現するための条件

(b)歴史的考察

①第一段階:閉鎖的抑圧体制(競争的寡頭体制)

→19 世紀西ヨーロッパ諸国など、「準ポリアーキー」の状態

②第二段階:準ポリアーキー→正ポリアーキー

→19 世紀末～WW I の約 30 年間に西ヨーロッパで進行

③第三段階:正ポリアーキーの下での民主化進行

→1920 年代～1960 年代の西ヨーロッパ先進民主主義国

※Dahl の原書は 1971 年に出版されたものなので、歴史的考察はここで終了

(c)同時代的考察(1969 年当時)

①正ポリアーキー(全 26 カ国)

→主に西欧諸国、アジアでは日本・インド・フィリピン

②準ポリアーキー(全 9 カ国)(アメリカ合衆国を含む)

∴南部の多くの州で 1964 年の公民権法通過まで多くの黒人が参政権ナシ
排除されていた人々は 10%未満 but それが特定かつ厳しく価値剥奪され
た少数派であるという事実

→その排除の差別的性格は非常に大きい

(資料)

<正ポリアーキーと認められた国：26カ国>

オーストラリア・オーストリア・ベルギー・カナダ・コスタリカ・デンマーク・ドイツ連邦共和国・フィンランド・フランス・アイスランド・インド・アイルランド・イスラエル・イタリア・ジャマイカ・日本・レバノン・ルクセンブルグ・オランダ・ニュージーランド・ノルウェー・フィリピン・スウェーデン・トリニダード＝トバゴ・イギリス・ウルグアイ

<準ポリアーキーと認められた国：9カ国>

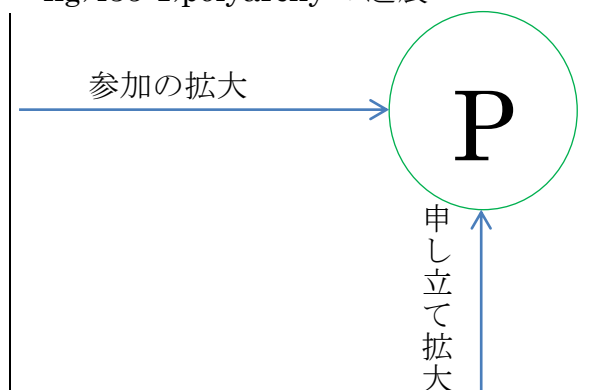
チリ・スイス・アメリカ・コロンビア・キプロス・ドミニカ共和国・マレーシア・トルコ・ベネズエラ

(2)仮説

→polyarchy の進行=政治参加・公的異議申し立ての増大

→政策決定において考慮すべき個人・集団・stakeholder の範囲増大

<fig;435-1;polyarchy の進展>



(3)公理

(a)反対勢力に関して予期される寛容コスト…低下

⇒政府が寛容になる可能性…増大

(b)反対勢力に関して予期される抑圧コスト…上昇

⇒政府が寛容になる可能性…増大

※「寛容コスト」、「抑圧コスト」—政府が反対勢力を寛容／抑圧するときのコスト
寛容することが危険でなくなる(つまり、寛容コストが低下する)

⇒当然政府が寛容になる可能性は増大する

ex)ミャンマー…寛容コストが非常に高いと思われる

(寛容になると政府に対する不満が噴出し、収集がつかなくなる可能性が高い)

→アウン・サン・スー・チー軟禁など、非寛容政策

(c)抑圧コスト>寛容コスト⇒競争的体制ができる可能性増大

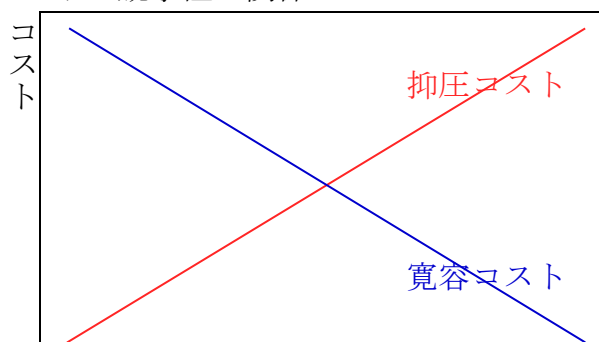
さらに、競争性が増すと抑圧コストが高くなる

∴競争性(発言の自由)が増すと、多くの批判がなされる

∴コストと競争的体制の可能性は、ある程度「鶏と卵」的な関係

(「抑圧コスト増大→競争性増大→抑圧コスト増大→…」ということ)

<fig;435-2;コストと競争性の関係>



競争的体制の可能性

436. polyarchy に有利な条件

	最も有利	最も不利
(1)歴史的展開*1	競争政治が包括性に先行(E 型)	包括性が競争政治に先行(F 型)
(2)社会経済的要因		
(a)秩序への接近*2		
(i)暴力*3	分散或いは中立	独占
(ii)制裁*4	分散或いは中立	独占
(b)経済形態		
(i)農業	自由農民*5	伝統的農夫*5
(ii)商工業	地方分散	中央集中*6
(3)社会経済的發展段階	高い*7	低い*8

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

(4)平等 or 不平等		
(a)客観的	低い or 平衡的・分散的不平等*9	高い or 累積的で極端*10
(b)主観的(相対的剥奪)*11	低い or 減少	高い or 増大
(5)下位文化の多元性*12		
(a)量的問題	低い*13	高い
(b)高い場合	どれも多数派でない どれも地域的でない どれも明確に政府外にはいない*15 相互保障アリ*16	一つが多数派 幾つかが地域的*14 幾つかが恒久的に政府と対立 相互保障ナシ
(6)外国の支配*17	弱い or 一時的	強い or 持久的
(7)政治活動家の信念		
(a)P の諸制度は正統	yes	no*17
(b)一方的権威のみ正統	no	yes*18
(c)P が主要問題解決に有効	yes*19	no*19
(d)相手への信頼の度合い	強い	弱い
(e)政治的関係		
・厳密に競争的	no*20	yes
・厳密に協調的	no*21	yes
(f)妥協必要へ望ましい	yes	no

*1先に参加だけ進んで普通選挙が実現すると、polyarchyが成立したかのように錯覚

意図的にそう主張する者もいるが実は違う ∴ elite間の競争ナシ

ex)現代のロシア

*2 接近=approach→いかにして秩序形成するか

*3 軍隊 or 警察

*4裁判所など司法制度…国家がこれを独占→自由に自分の意に反するものを処罰できる

*5 領主への服従ナシ 伝統的農夫=peasant

*6 中央集中だと、そこを掌握すれば商工業を掌握できてしまう

*7 基準は GNP/人=\$700~800

*8基準はGNP/人=\$100~200 但し、当時\$1=¥360であったことに注意

*9差が小さい、均衡がとれている、低所得or高所得の人が人種・職種などで偏っていない

*10差が大きい、高所得者はより富み、低所得者はより貧困になる状態

→高所得者は自分に有利なこの体制を維持しようと低所得者を抑圧 →polyarchy に至らない

*11客観的に貧困地域の人も、周囲が皆貧しく、かつ豊かな人の情報が入って来なければ貧しさを感じない

→その人の主観に立ってどう感じるかを考える※相対的剥奪(relative deprivation)とも言う

*12下位文化(subculture)が多元的=様々な価値観がある ∴この方が競争的体制に向く

*13 下位文化が力を持つと困るので

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

- *14 ex)スペイン…マドリード vs バルセロナ vs バスク地方
- *15 ほとんどの下位文化から政府に代表が送られている
- *16 政府と下位文化の間で暴力を行使しない、批判・弾圧を行わないという保障がある
- *17 独裁政を信じる人や議会制を否定する人で、政治的に active な人が多いと困る
- *18「国王は絶対だ」と信じる人がpolyarchyに不適なのは当然としても、Dahlは「国王は絶対に殺されなければならない、と信じる人もpolyarchyに不適だとした
→Dahl が単なるdemocracy 信者でなく、一方的な意見を嫌う、pluralistic democracyの信者だと分かる
- *19効率が悪くとも様々な意見をたたかわせることを尊重(Dahlはpluralist)
but neo-liberalの傾向→議会などで議論するより、自分のような優れた人間が政策決定すべき、とする
- *20あまりに競争的だと互いに譲るところを知らない→pluralistic democracyは動かなくなる
- *21 あまりにも賛成ばかりするのは良くない(∴批判すべき部分は批判が必要)

437. 特徴と批判

(1)[特徴]democracy の実証理論

→democracy…現実∧理想

- 従来の論攷は哲学的思考を離れられず
- Dahl:理想の側面排除、現実のみ扱う(“democracy”の語も回避)
- 測定可能な変数を設定(上表も本当は全て数量化)

(2)[特徴]protest の価値

- 「異議申し立て」という要素を pluralistic democracy の要素とする
(背景)1960 年代後半:アメリカ…公民権運動、フランス…五月革命、学生デモ
- 「民衆が参加すれば何でも democracy にあたる」という思考を排する
ex)ロシア、北朝鮮

(3)[批判](部分的な)論理的混乱

(a)polyarchy に有利な条件

暴力と制裁

政治的活動家の信念

この両者は支配的体制から独立した存在であるか

※同じ政治活動家であっても、北朝鮮とイギリスでは、活動するときの方策を変えるのではないか(政治体制に応じて運動のあり方を変えるのではないか)

(b)説明変数と被説明変数

→これらが互いに独立でなければ説明として不適

- ex)「バカ」=あほのこと、「あほ」=バカのことと定義したところで、それぞれの説明として不適である

but Dahl…政治体制から独立でない変数を polyarchy の説明に用いる

→論理的に詰まっていないのではないか

—次ページから試験範囲に復旧します—

500. 講義を終わるにあたって—concluding remarks—

以上、現代政治学の政治理論について講義してきた

最後に話しておきたいこと

501. なぜ政治理論か

なぜ一般的な教養課程の政治学の授業をしなかったのか

=政治学の基礎知識の授業

→扱わなかった訳ではないが、この講義は一般的なものと異なる

cf)大抵の入門書

→①理論がもつ暗黙の前提に触れず

②政治哲学史を除き、現代政治の理論がもつ歴史的・社会的背景に触れず

③理論自体の論理構造、理論の編成法にもあまり触れず

→理論の結果だけ覚えることになる

but 理論さらには我々の常識さえ前提や要因の変化に伴い変わりうる

→理論の結果のみ覚え、思考法や構造を忘れているのはむしろ害である

※この講義は理論の背景・前提、考え方、構造に注意した

※この講義に、政治理論のカタログとしての役割を込めた

—以下、2011 年度は扱わなかったが、ここまで来たからには全て扱う—

cf)その他の高橋先生の講義の特別な点

①数式などを活用し、現代の多様な理論を統一的にまとめた

②political science を政治哲学・政治イデオロギーと一括して扱う

(=”science”という概念を振り切る)

→では、”science”とは何か

502. 科学的理論の本質—P.K. ファイヤアーベント「方法への挑戦」—

(1)ファイヤアーベントの主張

※いかなる理論も現実の一部しか説明しえない

・現実…経験する全ての事象

but 個人の経験…限定的

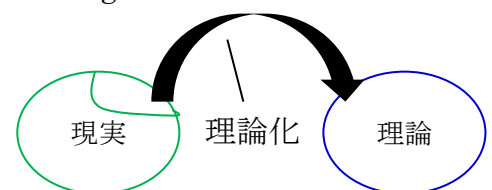
→他者の経験も現実・経験的事実として認める必要

・現実世界…複雑な多様

→理論化…現実の一部を抽出した議論

∴あらゆる現実に適応できる理論は存在しない(理論化の範囲は限定がつく)

<fig;502-1>



(2)我々が現実を確認する方法

・観察に基づく経験的検証(=scienceの基礎)

→観察に基づいた結果は客観的であるか

→ファイヤアーベントは否定的な見方を示す

∴観察≠客観的(∴理論や方法によって限界アリ)

＝すべての人が同様には行えず

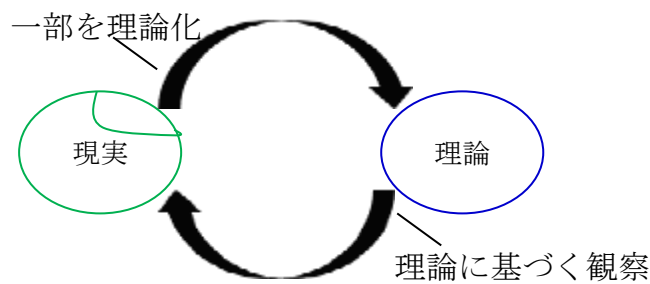
観察者の心の中にある理論や方法により結果変動

ex)Galileoが教会から弾圧された理由(望遠鏡をもった学者は他にも存在)

→Galileoのみが地動説提唱

☆以上より、<fig;502-3>のように、scienceは理論に基づく観察で現実を切り取り、その切り取った現実を理論化して理論を構成する(則ち循環する)といえる

<fig;502-3>



∴科学発展は停滞(∴同一事象の循環)

既存の理論から新理論は発生しない(データの集積から新理論は生まれない)

☆新理論は(それまで軽蔑・無視されていた)新たな前提・仮定に基づき、新たな観察を行うことにより発生する。

(3)理論が成功する条件

(a)対抗理論の排除

→他の理論を実際に攻撃(他の理論の不十分な点を論理的に挙げる)

→攻撃をされないようにすることも重要になる

(b)経験的内容の減少

→切り取る現実の範囲を小規模化する

→理論自体は矮小でつまらなくなるが、反論も出づらくなる

ex)レポート「世界の大学生の規範意識」(←アメリカで異なると反証される)

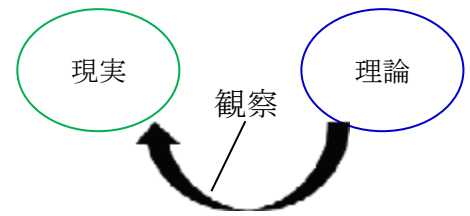
→「アジアの大学生の一」(←中国で異なると反証される)

→「日本の大学生の一」→「東大生の一」→「私の友人 2,3 人の一」…

※これは、物理学で実験条件を限定することに等しい

<結論>scienceは哲学・イデオロギーと異なるが、万能ではない

<fig;502-2>



503. 理論の相対化に向けて

・「私は相対主義者です」(by高橋先生)

1. 暗黙の前提

→これを飛ばすと背後にある偏向(bias)等が見られず
理論に書かれていないことまで読み取る必要がある

2. 歴史的・社会的背景

理論を作る人間もこの背景の中にある

→歴史的・社会的限界をもつ

＝特定の時代・場所において理論が成立—歴史的相対性—

※理論が無駄とはならないが、背景を知り、読み解くことは重要

3. 分野の限界 —分野的相対性—

ある分野で上手く説明できた理論が他に適応できるとは限らない

4. 価値は序列化可能

人間は社会的動物ゆえ、価値の相対化は不可能

※「私は価値に関しては相対主義者ではありません」(by高橋先生)

510. 特別付録—先生のありがたいお話—

1. 文献紹介

(1)「社会科学の現代の古典といわれる名著を一冊読みましょう」

現代の古典＝第二次世界大戦後のもので、今まで生き残ってきたもの

(2) 解説書の類はおススメしない

→原著を読みましょう(翻訳でよい)

→面白い本になればなるほど考えてしまって進まない

だが、それゆえによい

(3) オススメの本—後述—

2. 先生からのラストメッセージ

[編集注;今年度は時間の都合で省略されましたが、こんな時代だからこそ、過去のもので私が気に入った 2007 年のものを一つだけあげておくことにします。]

既成の権威・組織に頼らず、自分で考えることが大切です。

組織の中ではある程度その組織の体質に合わせる必要があり、自分の意に反することを行わざるを得ない時もあります。その時も心の中では“自分はそう考えてはいないが”という前置きをしてから行動し、完全に組織に染まらないようにしましょう。

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1 -FIN-

Bibliography

ここでは、先生が授業中に触れた文献+αについて一気に列挙することとします。紹介の順序は先生が挙げた順序に一致しています。私が読んだもの(あまり読めませんでしたが… 知識人としてはナサケナイ限りです…)又は先生がコメントした本については、簡潔に内容も書いておきます。太字のものに深い意味はありません。古城先生の国際関係論の大問Cで使おうなんて思わないで下さい。(使っても構いませんが、不可っても一切責任はとりません)

・0 番台(全体に関する文献)

『概説 現代政治の理論』(阿部斉著、東京大学出版会、1991 年)<再販未定>

高橋先生曰く、見解の違いもあるが講義内容に近い本とのこと。様々な政治理論が取り上げられており、多くの観点を得られる。講義で扱った政治理論の理解を深めるために読む価値はある。なお、このプリントの作成時にも参照した。

『現代政治学小辞典 新版』(阿部斉他編、有斐閣、1999 年)

高橋先生曰く、政治学に限らず辞典は持っていて良いとのこと。用語の定義を調べる際便利だが、訳語が講義と異なることもあるなど、注意は必要である。

『政治学』(久米郁男他著、有斐閣、2003 年)

政治学全般の教科書。図なども用いられており、読みやすい。将来政治学を専攻するつもりなら夏休みに読んでおいても良いのではないかと思う。(なお、古城先生が執筆者に入っている関係で、駒場図書館では概ね貸出可能にならない)

『現代の政党と選挙 新版』(川人貞史他著、有斐閣、2011 年)

高橋先生曰く、日本の政党・選挙に焦点を当てた解説書。講義ではそこまで扱わないが、テーマとしては重要とのこと。

『市民の政治学』(篠原一著、岩波新書、2004 年)

著者は現在の社会が「第一の近代」から「第二の近代」に移行していると説く。その中で、日本であまり注目されない「討議デモクラシー」の必要性に着目し、制度化に向けた取組を唱える。なお、著者の篠原氏は高橋先生の指導教官である。

・0 番台

『科学革命の構造』(T.S.クーン、みすず書房、1971 年)

・100 番台

『ゲーム理論と経済活動』(J.V.ノイマン他著、ちくま学芸文庫、

『戦略的思考法とは何か』(A.K.ディキシット他著、TBS ブリタニカ、1991 年)

ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1

(Copyright © RDSK@Q.Urah All rights reserved.)

本書の無断転載・無断複製・補注は認める。

『戦略的思考法をどう実践するか』(同上、阪急コミュニケーションズ、2010 年)
『日常生活に潜むゲーム理論』(フィッシャー著、日経 BP 社、2010 年)

・200 番台<注;2011 年度は通過>

『ハンドブック政治心理学』(河田・荒木著、北樹出版、2003 年)

・300 番台

『社会的選択と個人的評価』(K.J.アロー著、日本経済新聞社、1977 年)

著者がノーベル経済学賞を取った時の本。高橋先生曰く、数式だらけで読みにくく、放置していたら、地震以後には最早発見不能になったとか。

『きめ方の論理』(佐伯胖著、東京大学出版会、1980 年)

高橋先生曰く、310 番台の講義のタネ本とのこと。アローよりは読みやすいらしい。一つ言っておくと、図書館集密書架にある 2 冊のうち、310 番台のは汚れているから、360 番台のところにあるのを借りた方がよい。

『集合行為論』(M.オルソン著、ミネルヴァ書房、1983 年)

『ガンディーの真理 1・2』(E・H・エリクソン、みすず書房、

・400 番台

『社会システム論』(公文俊平著、1978 年)

『政治生活の体系的分析』(D.イーストン著、早稲田大学出版局、

・500 番台

※著者の怠慢のため、読み込めませんでした。ゴメンナサイ… 過去シケプリ(10 年 20 組ふーみん氏)の review が秀逸だったので、引用させていただきます。

『監獄の誕生—監視と処罰』(ミシェル・フーコー著、新潮社、

J.S.Mill のパノプティコンの話や、中世期に誕生した学校・時間割の話を通じて近現代の人間の理解を促し、いかに我々の社会が規律と訓練を順守するものなのかについて解き明かしている本

『大転換』(カール・ポランニー著、東洋経済新報社、

我々の社会の中で経済がどのような役割を果たしているのかについて述べた上で、世界大恐慌・WWII を通じて、どのように人々が market mechanism の危うさに気づいたのかを示し、global capitalism の危うさを指摘している。

『独裁と民主政治の社会的起源 1・2』(バリントンムーア Jr. 著、岩波書店、

歴史的制度論の元祖とも言われる著者のこの本は近代化論の話であり、農業社会から産業社会へと転換していく際に複数の階級が対立・協力し、資本主義的 democracy、ファシズム、共産主義などへ分岐していくという分析の本である。

※注)この本の訳者に高橋先生がいた気がする(by RDSK)

『大変貌』(ステュアート・ヒューズ著、みすず書房、

社会思想史の本で、WWⅡが知識人の大移動を引き起こした(ex.ユダヤ人や反ファシズムの知識人)ことを述べた後、彼らがどういう思想的な営みをし、どのような役割を果たしたかを示している。

『近代世界システム 1・2』(I・ウォーラーステイン、岩波書店、国際政治経済学の名著。発展途上国から先進国へ発達した国が少ない事象に注目し、それはコロンブスの時代から形成された世界システムが存在し、そのシステム上部の国と下部の国との間に大きな溝が存在しているからだ)と述べた非常にスケールの壮大な本

『ガンディーの真理 1・2』(E・H・エリクソン、みすず書房、※ちょっと長かったので省略しました。原本は「過去シケプリ 4」です。この本の中でエリクソンはガンディーの生涯を追体験している。則ち彼はこのライフサイクルによりアイデンティティーが変化することを追体験しているのである。それは「非暴力・不服従」という画期的な、この世界で全くと言っていいほど存在していなかった政治活動を、なぜガンディーがああ場で生み出し得たのかを知るためであった。

・もはや政治 1 ではないが政治学系統で面白かった本(RDSK の選考<選好>)

『国際紛争(原書第 8 版)』(ジョセフ・ナイ・ジュニア著、有斐閣、2011 年)

介入からグローバル化まで、国際関係の諸事象が説明されており面白い。この本の特徴としては、歴史的過程の記述が理論の記述と共に為されていることが挙げられよう。理論を学ぶにあたり、その背景・事例を理解するのは有用であろうから、その点でこの本は良書だと言える。私としては、「ソフトパワー」に関する部分が最も興味深かった。というのは、魅力などを通し他者の行動の方向性を変えさせるソフトパワーは、資源・国土面積という点で不利な日本において、学ぶべき点が多くあるように思われたからである。

『危機の二十年』(E.H.カー著、岩波文庫、1996 年)<再販未定>

著者は戦間期の国際政治学における理想主義の偏重に警鐘を鳴らし、リアリズムを重視することを説く一方、現実にも固執することも否定し、リアリズムとユートピアニズム双方のバランスをとることの重要性を唱える。確かに、安全保障では、国際連盟下での協調の失敗が示すように、現実的思考が要求されるであろう。また、環境問題では個々が勝手に利益を追求すれば「共有地の悲劇」に陥る恐れもあるから、理想に向けた協調が要求されるであろう。してみると、この本は今の我々にも示唆の多い、現代の古典ということが出来よう。

*注意)環境問題については日本がそんなに神経質にならなくてもよいのではないかと思います。(詳しく知りたい人は渡辺先生の本なんかを読んでみたらよいでしょう。)

・もはや政治 1 どころか政治学ですらないが、シケプリ作成時に参照した文献
(むしろ RDSK が勝手に読んだ文献とでもいうべきか)[著者 50 音順に配列]
『論語』(岩波文庫、1999 年<金谷治 訳注>)

知らないものはないであろう中国の古典。学而第一から堯曰第二十まで、言葉
がバラバラに記述されているように見えるが、読んでみると何か含蓄深い、共通
するものが見えてくる。シケプリ(最終解説)に一節を引用した。

『遺伝子が明かす脳と心のからくり』(石浦章一著、羊土社、2004 年)

『生命に仕組まれた遺伝子のいたずら』(石浦章一著、羊土社、2006 年)

『遺伝子が処方する脳と身体のビタミン』(石浦章一著、羊土社、2008 年)

クラスでも数人にとっている石浦先生の「現代生命科学」の講義録。生命科学の
知識と日常がうまく結びつけられており、面白い(しかもその辺のシケプリより
詳しい)。column の作成や、プリント内の配色にあたり多くの知見を得られた。

『深愛』(水樹奈々著、幻冬舎、2011 年)

声優・歌手として最前線で活躍する著者の自叙伝。私はこの本から何度となく
元気をもらった。「こんなシケプリを書いて何になるのか」と思ったときなども、
この本があったから乗り越えられた。現代の「激励の書」として広く勧めたい。

※なお、各肖像画は、入手しやすさを重視し、yahoo の画像検索より引用した。

※読む際に飽きないように、各所にネットで拾ったユータスくんの画像を入れた。

やはりユータスくんは教務課の唯一の財産だといえよう。



あとがき—我々は何処から来、何処に居り、何処へ行くのか—

この度は”ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1”をご利用下さいまして誠にありがとうございました。

質・量共に政治 1 シケプリにおける今世紀最大の作品だと自負しております。

今となっては、このシケプリのためだけに、「文科一類」の公式の英訳(letters 1 というそうです)を教務課に聞きに行ったり、図書館の本に埋もれたり、アルコール燃料(俗世では「酒」と呼ばれている)を投下したりしたのもいい思い出です。

さて、このシケプリを編集する際、私には様々な葛藤がありました。政治 1 のシケプリとして現時点で最高のものを創ることは当然のこととして、果たしてどこまで踏み込むのか、どの程度まで他分野とも繋げるのかという点は、本当に悩みました。そこで、column という形や bibliography という形を通して、試験範囲や科目にとらわれない記述を心がけました。皆様にもご理解頂ければと思います。

このシケプリは、図解式にしたのに word 表示で 49000 字を突破しているので、印刷はご計画的にお願い申し上げます。なお、試験対策(特に第一問)に特化したプリントとして、本書の姉妹編”ULTIMATE POLITICAL SCIENCE 1—教養人の嗜み—”と一緒にアップされます。是非ともご活用下さい。

一つ述べておくこととして、シケプリ制作の際、過去シケプリも大いに参照しました。今年度範囲外の部分は、これらなくして執筆できなかったでしょう。特に、2010 年度 7 組 Y・H 氏制作、20 組ふーみん氏制作のもの、2009 年度 10 組澤井氏制作のもの、2008 年度 22 組東條氏制作のものは、私が知る十数種類の中でも極めて良質でした。政治 1 シケ対の先達として大いに敬意を表します。

また、他科目のシケプリからの引用も行いました(電子化されているからコピペできて、同じ内容であれば文献を打ち込むより遙かに効率的なので…)制作者各位に心より御礼申し上げます。

最後に、シケプリ作成にあたり、マジメに講義に出た学生の観点から批評してくれた A 君、A さん、K さん、S 君、T 君また、講義を切るだけ切った人の観点から評価してくれた I 君、O 君ほか、7 組の皆様に無上の感謝を捧げたいと思います。

ではでは、試験に向けて頑張りましょう。良いお年を!

2011 年 7 月 7 日 七夕の夜に

編集主幹 RDSK@Q.Urah